

# Determination Decade

黒田雄一

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Rosellaのギターを務めている少女——冰川紗夜。

彼女には門矢『司』という幼馴染みがいた。

彼の存在が、今の彼女を支えていた。

しかし突如、彼が存在ごと消えてしまう。

紗夜はまだどこかにいると信じ、探してみると門矢『土』を見つける。

だが、その『土』は紗夜の知っている『司』ではなかつた。

——これは、『土』とともに『司』を探す旅に出る少女の物語——

※バンドリキャラ全員を出す予定ですが、設定上キャラ崩壊します※

※仮面ライダーのキャラ、設定も崩壊します※

# 目次

序章	『司』と『士』	第九話	意外な訪問者
第一話	心の支え	第十話	戦士失格
第二話	消えたもの	第十一話	均衡を保つ者たち
第三話	ディケイド	第十二話	忘れた者、覚えていいる者
第四話	旅の始まり	第十三話	災害
第一章	クウガの世界	138	
	→ 戦う理由、守る理由	27	
第五話	変わった世界、変わった人たち	18	
第六話	戦いの記憶	9	
第七話	彼は今	1	
第八話	謎は増え続ける		
ち			
77	65	55	43
		154	
		124	110
			96

# 序章 『司』と『士』

## 第一話 心の支え

「……」

ギターを背負つた、青緑の長髪をした少女が歩いている。

彼女の名は氷川紗夜。

ガールズバンド『Rロose ゼlilia リa』のギターを務めている。

彼女は今、バンド練習のためライブハウス『CサIリRクCルLルE』に向かっていた。

「！」

その道中、紗夜はある人物を目撃し、進む道を外れてその人の元へ。

生真面目でストイックな性格をしていてる彼女が、寄り道することは滅多にない。友達やバンド仲間と一緒にいない限り、自ら寄り道する人ではなかつた。

そんな彼女を寄り道させてしまうほど、その人物は彼女にとつて大切な存在だつた。

「……」

茶髪の男が、赤紫色が基調の二眼レフカメラで街の風景を撮つていた。

彼の名は門矢司。

紗夜の幼馴染み。今は別の高校に通っている。写真を撮るのが趣味である。

「司、調子はどう?」

「うおあ!?」

司の後ろから紗夜が話しかける。それに驚いた司が振り向きながら尻もちを着く。

「……ふふつ、驚きすぎよ」

「ごめん……」

紗夜が微笑みながら、司に手を差し伸べる。彼はその手を取り、立ち上がる。

「まあまあかな。現像するまでわからないから。それが面白いからいいんだけど

司は紗夜を撮りながら答える。

「私は、あなたになら撮られても平気ですが、くれぐれも無闇に他人を撮らないように。  
訴えられても擁護できないわ」

「大体わかってる。昔から何回も言わればね」

『大体』って付けるのも、昔から変わらないわね』

「紗夜の調子はどう?」

「今のところ順調よ。これから練習があるわ」

「あつ、そうだつたんだ! ごめん、時間を取らせて」

「何言つてるの? 話しかけてきたのは私の方じやない。それに、集合時刻まで三十分

「あるから大丈夫よ」

「そ、それなら良かつた……」

司がホツとして肩を落とす。

それと同時に、近くの花にミツバチが止まる。司はそれを見逃さず、素早くカメラを取り出して慎重に撮る。

「……あなた、写真家にはならないの？」

「えつ!？」

「司の写真、昔と違つて今は綺麗に撮れてる。私としては、その道に進むのも悪くないと  
思うわ」

「そう言われると嬉しいけど……」

司は自信なさげに下を向く。

紗夜はそんな彼の前に立ち、彼の両肩を掴んで上を向かせる。

「もう少し、自分に自信を持つて。私は、あなたを信じてるから」

「つ!？」

紗夜の言葉に、司は顔を赤くする。

「そろそろ行かないと、練習に遅れるので。また今度」

司の様子を気にすることなく、CIRCLEへ向かう。

紗夜は時間を確認するため、ポケットからスマホを取り出す。スマホの待ち受けが、司が写った写真になっていた。

※

紗夜には、双子の妹——日菜<sup>ひな</sup>がいる。  
日菜は何でもすぐに熟せる天才。紗夜が努力を積み重ねたことでさえ、あっさりと超えてしまうほどだ。

これに関して、紗夜は幼い頃こそ気にしてなかつたものの、心体の成長とともに劣等感をい抱き始め、次第に距離を置いていくようになった。

「…………」

中学時代――

紗夜は学校の屋上で黙々とギターを弾いていた。

その時の表情は真剣そのもので、演奏以外のことは一切考えていなかつた。

——カシャ！

「?」

カメラのシャッター音を耳にした紗夜は、ギターを弾くのを止め、音がした方を向く。一人の少年——門矢司がカメラで紗夜を撮っていたのだ。

「司! 勝手に私を撮らないでと何度も言つてるじゃない!」

紗夜は強い口調で司を叱り、カメラを奪い取ろうとする。

「バ、バめん! つい!」

司は怯えつつも、紗夜の手を的確にかわしていく。

「つい——じゃありません! 盗撮は立派な犯罪、私でなければ訴えているわ!」

「どうしても!」

司は思いきつて紗夜の手首を掴む。

「?」

強気になつた司に、紗夜は驚いて思わず右足を引く。

「どうしても! ギターを弾いている時の紗夜を、紗夜自身に見せたいんだ! その時の紗夜が、一番輝いているから! 真剣な表情で弾く姿を! 本気で取り組んでいる姿を!」

「つ!」

司の想いがこもった言葉に、紗夜の冷えた心が溶け始める。

「バ、バめん！ 偉そうなことを言つて……」

我に返つた司は、紗夜の手首を離す。

「…………」

紗夜は無言のまま、ギターを弾き始める。

「おお……」

司が紗夜のギター テクニックに見惚れ、聞き惚れないと彼女は指を止める。

「…………撮りなさい」

「えつ…………？」

「…………あなたの気が済むまで、撮りなさい」

そう言つて、紗夜は演奏を再開する。

司は慌てつつも紗夜を撮り始める――

後日、紗夜は現像された自分の写真を見た。

その写真は歪んでおり、お世辞にもいい写真と呼べるものではなかつた。

しかし、この写真を機に紗夜は、自分にとつてギターは特別なものであることに気づく

き始める。

それは皮肉にも、ギターへの固執へと繋がつてしまつた。

だが一人の少年——門矢司の存在もまた、彼女に影響を与えていた。  
ロゼリアを抜けかけた時——

自分の音を見つけられなかつた時——

お菓子作りに苦戦してた時——

NFOで行き詰まつた時——

日菜とハンバーグにチーズを乗せるか論争してた時——  
彼が助言をくれたのだ。

彼の言葉があつたから、紗夜は歩み続けることができた。  
次第に、彼を特別な存在として認識し始めていた。  
しかし、紗夜はそれが恋であることを知らなかつた——

「おはようござります」

CIRCLEのスタジオに入つた紗夜。

些細なトラブルが起きつとも、平和な日常が続くと紗夜は思つていた。

「変身！」

司が一人、戦っていることを知らずに――

## 第二話 消えたもの

「はあ……はあ……！」

荒れ果てた街を、紗夜は走っていた。

街には謎の怪物が溢れだし、人を無差別に襲っている。辺りを見渡せば血糊のない場所などなかつた。

『ガアアアアアアアアアアアア!!』

「?」

紗夜の目の前にこの世のものとは思えない肉だるまのような怪物が現れる。

紗夜は恐怖に体が支配され、体がうまく動かなかつた。

『ガア!!』

「きやあ!!」

怪物が紗夜に襲いかかる。彼女は思わず目を閉じる。

「はあ!!」

一人の少年が怪物を蹴り飛ばし、紗夜を守つた。

「……？」

紗夜が目を開け、何が起きたのか確認する。

「司!?」

「紗夜！ こっちだ！」

「!?

少年——司は紗夜の腕を引っ張り、この場から離れる。

「?!

しかし、逃げた先には大量の怪物がいた。

気が付くと、無数の怪物が司と紗夜を囲んでいた。

「………

絶対絶命のピンチ。司は覚悟を決め、紗夜に告げる。

「……紗夜、俺が道を作る。そしたら逃げてくれ

「司はどうするの!?」

「俺はこいつら全員倒してから紗夜を追う」

「そんなの駄目よ！ あなたも——」

「逃げ続けたら終わらない。この悪夢は永遠に……」

司が緑色のカメラのようなものを取り出し、それを腰に当てる。

するとベルトが放出され、腰に巻き付いて固定される。

変身ベルト——司が付けたものが何なのか、何故か紗夜はわかつていた。

「俺はこの世界最後のライダーだ！　俺が戦わなければ、紗夜を守れない！」

司はベルトのハンドルを引き、バツクルを回転させる。

ベルトに付いていた本のようなものから一枚のカードを取り出す。

「変身！」

カードの裏面を外に向け、バツクルに挿入する。

『カメンライドオ！』

バツクルから謎の音声が聞こえた後、司はハンドルを戻して変身する——

『デイケイド！』



「…………？」

ベッドの中で目を覚ました紗夜。

「夢…………？」

先程の出来事は紗夜が見ていた夢であつた。

(変な夢ね……司はあそこまで勇ましくないわ。私がいないと……)

そう思いながら、スマホの画面で時間を確認する。

「？」

紗夜は頭に疑問符を浮かべる。

スマホの待ち受けが、ギターの写真に変わっているのだ。

(寝ぼけて変えたのかしら……?)

そういうえば昨日の練習を終えてからの記憶が曖昧のようだ。

紗夜はこのことを些細なことだと思い、待ち受けを変えようとギャラリーを開く。

「え…………？」

しかし、決して些細なことではなかつた。

ギャラリーの中に、司の写真が一枚もなかつたのだ。

司の写真が一枚だけなら、誤つて消した可能性がある。しかし、紗夜は彼の写真を何十枚も撮っているのだ(なお、本人は撮られた仕返し程度にしか思つていなかっため、深い意味はない)。

「なにが…………どうなつて…………！」

不安になつた彼女は、彼と連絡を撮ろうとSNSアプリ『コネクト』を開く。

「え……え……？」

司の連絡先が見当たらなかつた。何十回、何百回も連絡を取つたのにも関わらずその履歴さえ残つていなかつた。

「どうして……！」

紗夜の体が震え出す。

これまで接してきた司は、自分に希望を与えてくれた男は、存在しなかつたのか。

「そんなはずないわ！ そんなはずは——」

「おねーちゃん？」

部屋に短髪の、紗夜と顔立ちの似た少女が入つてくる。

彼女こそ、双子の妹——日菜である。

「…………」

紗夜は入つて來た日菜を黙つて見つめる。

普段であればノックしなかつたことに怒るのだが、そんなことしている場合ではなかつた。

「おねーちゃん大丈夫？ すんごい汗かいてるけど」

「日菜……門矢司という名前に聞き覚えはある？」

「うーん……門矢『ツカサ』……あつ！」

「あるの!?」

紗夜が驚愕の眼差しを日菜に向けた。日菜は目をキラキラ光らせながら答える。

「うん！ 昨日街中で私の写真撮つてくれたよ！ 今日その写真ができるらしいから、学校終わつたら会おうかなつて」

「今はどこにいるの!?」

紗夜が焦つた様子で日菜の両肩を掴み問いかける。日菜はその様子を不思議に思うも答える。

「うーん……ごめん、わからないや。今日会うの約束した時も『そこら辺歩いてればいざれ現れる』とか言つてたし、変な人だつたよ」

「その『そこら辺』っていうのは!?」

「CIRCLEの近くにある公園だよ」

「?」

日菜が言つた場所は、司の行きつけの場所だ。

紗夜は日菜から離れ、素早く着替えた後、公園へ向かう。

「おねーちゃん!? 学校は!？」

日菜は紗夜を呼び止めるも、紗夜は立ち止まることなく公園へと向かう。

※

「はあ……はあ……！」

紗夜は息を切らしながら走る。  
ただ走る。

大切な人がいるはずの公園へ――

「?」

『ツカサ』はいた。確かにいた。

しかし、紗夜が知つてゐる『司』よりも体格が一回り大きかつた。  
「おいてめえ！ どういうつもりだあ！」

さらに、ヤクザのような男達四人に囲まれていた。

しかし、『ツカサ』は平気そうな顔で二眼レフカメラをいじつてゐる。  
(あのカメラは!? 間違いない、あの人人が司で――)

合つてゐる――そう思つたが……

「ぎやーぎやーうるさいな、要件を言え」

『ツカサ』は男達に対し冷たくあしらおうとする。  
(司があんな言い方を……おかしいわ……――)

『ツカサ』のことがよく掴めない紗夜は、公園の木に隠れて様子を伺うことに。

「てめえが昨日撮った写真、ブレッブレジやねえか！ 最高の写真にするとか言つたから撮らせてやつたのに、この有り様は何だ！！」

「何を言つている、最高じやないか。その写真の良さがわからないのか？」

「てめえ舐めてんだろ！」

男の一人が『ツカサ』に殴りかかる。『ツカサ』はカメラの方に視線を向けたまま、男の拳を難なくかわした。

「こいつッ!!」

他の男達も『ツカサ』に攻撃し出す。だが攻撃が彼に命中することなく、滑らかにかわされていく。

「……この世界も違うのか」「この世界……？」

紗夜は『ツカサ』が呟いたその言葉の意味が理解できなかつた。  
「何言つてんだてめえ！」

言葉の意味がわからなかつたのは男達も同様。  
男の一人が再び殴り始める。

「ぐはッ！」

男の拳を受けたのは『ツカサ』ではなく、男の仲間だつた。

「何スンだ貴様ア!!」

拳を受けた男が、攻撃してきた男に殴る。

「何しやがる!!」

男同士が殴り合いを始める。

その隙に『ツカサ』はその場を去ろうとする。

「逃げんじやねえ!!」

他の男二人が『ツカサ』を挟み撃ちで拳を振る。『ツカサ』は前に身を屈めて攻撃をかわすと、男二人の拳がそれぞれの顔面に当たる。

「う…………」

「あ…………」

男二人は気絶し、仰向けに倒れる。

「…………」

『ツカサ』は黙つてカメラをいじつたまま、公園を去つて行く。

(……あれば、本当に司なの?)

まだ確信を持てなかつた紗夜は、彼の後を追つていく。

### 第三話 デイケイド

『ツカサ』は、CIRCLEの屋外カフェエリアに足を運んでいた。

そこで何かを食べるわけでもなく、ただひたすら写真を撮っていた。

……カフェにいる人を。

「——勝手に撮らないでもらえますか?」

案の定、椅子に座っていた少女から苦情が来る。

その少女は、紗夜だった。

「安心しろ、悪用はしない。現像したら渡してやる。俺の写真は世界で最も価値のあるものだ。きっと満足するはずだ」

「そういう問題ではありません。撮られた相手に少しでも不快感があれば、トラブルの元になりかねません。そう前から……」

紗夜は冷静に言葉を返す。そして、目の前にいる『ツカサ』が、自分の知っている『司』であるか確かめるため、躊躇いつつもある言葉を口にする。

「ずっと前から言つてるわよね?」

「……ずっと、前から？」

『ツカサ』は、驚いた顔で紗夜に急接近する。

「俺のことを知ってるのか？」

「えつ……!?」

紗夜は予想外の反応に戸惑う。

(もしかして、司は記憶を失ったの？) でも、それだけなら写真や連絡先が消えた原因は何？)

「教える！ 僕が何者なのかを！」

「……その前に今、あなたが覚えていることを教えてください」

ここで取り乱すわけにはと、紗夜は気を落ち着かせて『ツカサ』に尋ねる。

言われた『ツカサ』も落ち着きを取り戻し、椅子に座つて紗夜と向かい合う。  
「俺の名は門矢士。かどやつかさ……自分について覚えているのはそれだけだ」

「……わかりました。私が知っている『司』について話します。その前に私の自己紹介

を。冰川紗夜。『司』とは幼稚園の頃からの幼馴染みです」

『サヨ』……聞き覚えがないはずだが、懐かしい感じがするな……

『ツカサ』が下を向いて呟く。

その様子を見た紗夜は希望を持ち始め、『司』の話を始める。

「司の苗字は、あなたと一緒にです。門矢司。かどやつかさ 門と矢で『門矢』、司ると書いて『司』です」

「待て、苗字はそれで合っているが、下が違う」

「え？」

「同士の士と書いて『士』だ。これに間違いは絶対にない。名前だけは鮮明に覚えている」

ツカサ  
士は言い切った。

紗夜は鼻の下に手をあて、少し考えて話す。

「……もしかしたら、人違いという可能性もあります。私の知っている司は、引っ込み思案で臆病だけれど、人に優しく、何より私に希望を持たせてくれましたから。それに比べてあなた——門矢さんは、自信家であり尚且つ自分勝手。自分の行動で他人を不幸にさせていることにも気づかない。司とは正反対です」

「ほう……言つてくれるね」

「ただ一つ、門矢さんが司と人違いであると言いつ切れない部分があるんです。門矢さんが持つているそのカメラ、司も愛用していました」

「カメラ……」

士は首から下げている二眼レフカメラに手をかける。

「そのマゼンタカラーの二眼レフカメラ、司が自分でカスタムしたものだと本人から聞きました。それと全く同じものを持つてゐるあなたは、司からそれを盗んだか、もしくは……あなたが『司』だからか——と、考えられます」

「……なるほど、大体わかつた——」

(『大体わかつた』……司の口癖)

「——の世界の俺は、どこかに消えてしまつたと」

「…………え？」

紗夜は、士の言つてゐることが理解できなかつた。

「少なくとも、俺はこの世界の住民じやない。俺はこの世界に拒絶されてゐるからな」「な、何を根拠に!?」

「これを見ろ」

士は一枚の写真を紗夜の前に突き出す。

「?」

紗夜は驚き立ち上がる。

一人の少女がカメラに向かってピースしている写真であるのはわかるのだが、少女が

歪んでおり、少女が二重になつて写つている。

しかし、紗夜が一番驚いたところは、その写真の少女が日菜であるということだ。

「いた！ おねーちゃん！」

写真に引かれてきたかのように、後ろから日菜の声が聞こえてくる。紗夜が声の方を向き、日菜の姿を見る。

日菜が紗夜の鞄も持つて走つてくる。

「日菜？！」

「おねーちゃん！ はいこれ！ もう遅刻だと思うけど」

「これをわざわざ届けに!?」

「うん！」

日菜が満面の笑みで答えた。

「……ああ、どこかで見たことあるなと思つたが、昨日ひたすら俺にかまつてきた奴の姉だったのか」

士が日菜と紗夜を見比べながら言葉を口にした。

「あっ、士さんだ！ それ、もしかしてあたしの写真!?」

士の存在に気づいた日菜は強引に奪い取り、ジッと写真を見る。

「あはは！ 何これ？ こんな写真見たことないよ！」

日菜は自分が歪んで写つた写真を面白がる。

そんな彼女を他所に、士は話を続ける。

「その写真が証拠だ。この世界は俺に撮られたがつてないつてことだ」

「……ただ撮るのが下手ということは？」

「それはない」

「よく言い切れますね……私の知る司も、昔はそのくらい歪んだ写真を撮つていきましたが、経験を重ねるとともに腕を上げ、今では綺麗な写真が撮れていますよ」

「司は司、俺は俺。性格や名前の漢字が違うというのならば、写真の技術も——違う——そう言おうとした時——

「きやああああああああああああ!!」

「?」「!」「!?

女性の悲鳴が聞こえ、士と紗夜、日菜の三人に緊張感が走る。  
三人は悲鳴が聞こえたCIRCLE側の方を向く。

『ゴオア!!』

蛹のような姿をした怪物達が暴れまわり、人を襲いながらCIRCLEを破壊していく。

「ああ!! またCIRCLEがあ!!!」

CIRCLEが壊れていく様に、スタッフである月島まりなが涙を流していた。

「ワーム!? どうしてこの世界に!?」

士が怪物の名称を口にしながら、あるものを取り出した。

「?」

それを目にした紗夜は、目を疑つた。

士が取り出した、カメラのようなもの――

――夢に出てきた、変身ベルトとそっくりだつた――

だが夢のものと違い、色は白。レンズの周りに書かれている九つの紋章が全て別の紋章である。

士は変身ベルトを腰に着け、ハンドルを引いてバツクルを九十度回転させる。その後、本のような入れ物からカード一枚を取り出し、前に構える。

「変身！」

カードの裏面を外にし、バツクルの挿入部に入れ——  
『カメンライドオ！』  
ハンドルを戻す——

『ディケイド！』

すると、土から円を描くように九人の幻影が生み出され、彼を中心につになつてモノクロのヒーロースーツを身に纏う。その後、ベルトのレンズから七枚の赤い板が生み出され、顔面部に刺さると同時にスーツに色がつき、マゼンタが基調のスーツへと変わった。

「はああ！」

変身を遂げた土が、勢いよくワームと呼ばれた怪物達の中に飛び込んでいく。  
「ええ!? 何あれ!?! 日曜朝にやつてる特撮ヒーローみたい！」

変身した彼の姿を見て、日菜は気持ちが高ぶる。

「名前あるのかな?」

「……デイケイド」

紗夜が目を見開かせて呟いた。

「え? おねーちゃん知ってるの!?」

日菜が聞くと紗夜は頷き、改めて答える。

「仮面ライダー……………デイケイド」

## 第四話 旅の始まり

「はああ！」

仮面ライダー・ディケイドに変身した士は、CIRCLEを荒らしている三体のワームの中へ飛び込むように、一体のワームを殴る。

背中を殴られたワームは前に怯んだ後、士の方を向く。他の二体も士に気づき、三体は攻撃対象を士に移す。士は迫つてくる三体を一体ずつ蹴り飛ばした後、カードが収納されている電子辞書のようなものを取り出し、収納されていた刃を伸ばし、『ソードモード』に切り替える。

士が取り出したものの名は『ライドブツカー』。

カードを収納できるだけでなく、武器としても扱うことができる。

『ソードモード』の他に『ガンモード』も存在する。

士はライドブツカーで、ワーム達を素早く斬っていく。

『グアア!!』

すると、三体のワームが同時に姿を変える。

蛹が羽化するように、クモのような姿へと成長を遂げた。

その束の間、ワーム達は目に捕らえられない速度で動き回り始める。

「!?」

「えつ、速つ!? どうなつてるの!?」

それを見ていた紗夜と日菜が驚く。

日菜は何故か楽しそうに見ていた。

「これを使うしかないな」

士はベルトのハンドルを引き、一枚のカードを取り出してバツクルに入れる。

『カメンライドオ!』

『カブト!』

ライダースーツが機械音を立てながら変形し、  
『C H A N G E B E E T L E』

という音声が聞こえると同時に、カブトムシのような赤が基調のライダー、『仮面ライダー カブト』へと変身を遂げる。

士は空かさず新たなカードを取り出し、バツクルに差し込む。

『アタックライドオ!』

ハンドルを戻し、カブトの特殊能力を引き出す。

『クロックアップ！』

バツクルにカードが認識されると、士もワームと同様の素早さで動き出す。  
「はあ！！」

士はワーム達の速さに追いつき、ライドブツカーで斬り倒していく。  
『ガアア!!!』

倒されたワームは、緑色の爆発を上げて消滅した。

士はバツクルからカードを取り出し、ディケイドの姿に戻る。

「すぐーい！ 本物のヒーローみたい！」

日菜が目を光らせながら、士を見ている。

「…………」

紗夜は士の戦いを見て違和感を覚える。

(あの戦い方……どこかで――)

「おねーちゃん！ 危ない!!」

「え――？」

『バアア!!』

紗夜の背後から、新たな怪物が彼女に襲いかかる。

日菜が紗夜を抱えるようにして横に転がり、攻撃をかわす。

紗夜を襲おうとした、モグラのような姿をした怪物。それが五体もいた。

「今度はイマジンか！」

怪物——イマジンを見た士は、新たなカードをバツクルに入れる。

『カメンライドオ！』

ハンドルを戻し、士は新たな姿へ――。

『電王！』

電車のホームで流れるような音楽が流れた後、黒いスーツを身に纏い、電車のレーンに流されるように装着される。桃のような複眼を持つ、『仮面ライダー電王』へと変身を遂げた。

その後、新たなカードを入れる。

『ファイナルアタックライドオ！』

ハンドルを戻し、必殺技を発動する。

『デデデ電王！』

ライドブツカーの刃が七色に光り始める。

「はあ！！」

士は走り出し、イマジン五体全てを一度で斬り倒す。

「俺の必殺技、パート1」

格好良く（？）決めた後、イマジンが爆発して消滅する。

「ふう……」

士は手を払い、変身を解く。

「どうなつているんだ？」

「それは私たちの台詞です！」

紗夜が立ち上がり、士に寄り詰める。

「？」

私たちの台詞——という意味を捉えられなかつた日菜が頭に疑問符を浮かべながら立ち上がる。

「あの怪物たちは何なんですか!?」　あの怪物たちを知つてゐるんですか?」

「……わからない」

「何を言つてるんですか!？」

「知つてゐる理由がわからないんだ。どうして戦い方を知つてゐるのか……なぜ怪物の名前が出てくるのか……」

士が変身ベルト——『ディケイドライバー』に目を向けながら話した。

「ねえ！　ちよつとヤバいよ！」

日菜が焦つた声を出す。

その声を聞いた紗夜と士が周囲を見渡すと、いつの間にか大量の怪物たちに囲まれていた。

「ちつ！ キリがないな！」

士は再びカードを取り出し、変身しようとするとする。

「変——」

その瞬間、周辺に強い光が差し掛かる。

士、紗夜、日菜の三人は思わず目を伏せる。

「…………」

「…………」

「…………」

数秒後に光が消え、三人が目を開ける。

「!？」

「!？」

「!？」

三人は驚く。

なぜか周囲の時間が止まっているのだ。

風になびかれた木の枝が変な方向に曲がった状態で固まり、机から落ちかけたコ一

ヒーが空中で静止していた。

更に、大量にいた怪物が最初から存在していなかつたかのように消えていた。

「え!? なんでなんで!? すぐーい!!」

不思議な現象に、日菜のテンションが上がり、くるくると回り出す。

「一体何が——」

紗夜は原因を探ろうと周囲を見渡す。

「つ!?

思いがけないものが目に入つた紗夜は、言葉を失う。

前方遠くに、二眼レフカメラを首からぶら下げた少年の姿が。

その少年が誰なのか、紗夜が見間違えることは決してなかつた。

「司!!!」

紗夜が全速力で走り、司の元へ行こうとする。

「おねーちゃん!」

突然の行動に日菜は動搖しつつも、その後を追いかける。

「おい待て！」

士も後を追いかける。

「…………」

なぜか司は紗夜に背を向け、歩き出す。  
「待つて!!」

紗夜は追いかけ続ける。走っているのにも関わらず、司との距離が全く縮まらない。  
「はあ……はあ……！」

紗夜は無我夢中で追いかける。

もう二度と見失いたくない、ずっとそばにいたい。

その想いだけで、彼を追いかけていた。

「?」

彼を追いかけ、辿り着いた先は司の家だった。

司の家は古びた写真館なのだが、幼い頃に両親が亡くなつたため、とっくの昔に閉業している。

「…………」

「はあ……はあ……やつと追いついた……！」

紗夜の後を追いかけていた日菜が追いつき、息を整える。

士も追いつき、家を見る。

「ここ、俺の家のはずなんだが……」

「えっ!?」

士の発言に、紗夜は耳を疑う。

「そ、そんなことは——」

「事実はどうであれ、ここにもう一人の俺が入ったのなら、行くだけだ」  
士は遠慮なく司の家に入る。

「待ちなさい!」

紗夜も続いて入り——

「お邪魔しまーす!」

日菜も入る。

二人は士の後を追い、廊下を歩いて行くと、一つの広い部屋に辿り着く。

「ここは…………？」

本当に何もない部屋で、不思議に思つた紗夜が周囲を見渡す。

「? 日菜?」

近くにいたはずの日菜がいないことに気づく。思えば、先に入っていたはずの士の姿

もない。

「日菜！ 門矢さん！」

紗夜は一人の名を呼びながら、部屋を出ようと扉に手をかける。

「——紗夜」

「?」

心地良い、聞き慣れた優しい声に反応した紗夜は後ろを向く。

部屋の中央に、司が立っていた。

「司!? 司なの!?」

「…………」

司は黙つて頷く。

「良かつた…………あなたが無事で…………！」

安心した紗夜は、涙を浮かべながら司に近づき、彼に触れようとする。

「え…………？」

しかし、触れることができず、実体がないように空回りする。

「司…………？」

「…………めん、紗夜。俺はこの世界にいないんだ」

「そ、それってどういう…………？」

衝撃の真実に、紗夜は思わず後ろに下がる。

「俺は――」

何かを言おうとした司。だが、自分の体が薄れていくのを確認し、別の話を持ち出す。

「ごめん、時間がないから、これから言うことをよく聞いてほしい」

真剣な眼差しを向けてくる司に対し、紗夜は息を呑んで頷く。

「この世界にいる、もう一人の俺と旅をしてほしい」

「旅?」

「他の世界――九つの世界を。そして世界を繋ぐんだ。さもなくば、全ての世界が消滅してしまう」

「世界を……繋ぐ……?」

紗夜はその言葉の意味を理解できなかつたが、急いでいた司は意味を答えぬまま話を進める。

旅の中で意味がわかると思ったから。そして、次に話すことがそれ以上に重要なことであるから。

「そして、その旅の中で『ディターミネイションドライバー』を見つけてほしい」

「ディターミネイション?」

「このカメラに似た変身ベルトだ」

司は二眼レフカメラを手に取る。

「全てのライダーを、デイケイドをも超える力を得ることができるベルトだ。それを見つけたら誰にも渡すな。もう一人の俺にも……俺自身にもだ。可能ならば破壊してほしい」

「……わかつたわ。でも最後に聞かせて。司は今、どこにいるの？」

「…………」

司は答えなかつた。答えたくないよう見えた。

そして、徐々に司の姿が消えていく。

「どうして答えないので!!」

紗夜は涙を流す。

それを見た司は苦しそうな表情を浮かべるが、最後まで紗夜の問いに答えることなく、一方的に話す。

「……最後に一つだけ。紗夜、俺は必ず取り戻すから。皆の居場所を。紗夜の居場所を」

司の体が消えると同時に、決意を告げる。

「たとえ、この命に代えても――――――」

「――ちゃん!!　おねーちゃん!!」

「?」

気が付くと紗夜は、ソファの上で横になっていた。

日菜が心配した顔で紗夜を呼び続けていた。

「私は……?」

紗夜は寝ぼけたように体を起こす。

「良かつたあ！　おねーちゃん急に倒れるからあ！　心配したよお!!」

日菜は紗夜に抱きつき、彼女の胸に顔を押しつけて号泣する。

「う、うめんなさい……

自分の身に何が起きたのか。司とのやり取りは夢だったのか。

紗夜は日菜に一言謝ることしかできなかつた。

ふと紗夜は部屋を見渡す。

司と話した部屋と同じように感じるが、机や椅子があり、特に壁際にある背景ロールが目に入つてくる。

その背景ロールには、九つの地球が一つの地球を囲んでいる絵が描かれている。  
(九つの地球……『九つ』……もしかしてこの絵は……!?)

紗夜は日菜が抱きついていることも忘れて立ち上がる。

「?」

その行動に驚いた日菜は彼女から離れる。

「おねーちゃん、どうしたの?」

日菜は目を擦りながら尋ねるが、紗夜は黙つたまま背景ロールに近づく。

(九つの世界……もしかしたら、司はこの中のどこかに―――。)

紗夜は旅をする決意を――司を探す決意を固めながら、無意識の内に背景ロールに手を当てる。

すると、別の背景ロールが上から降りてくる。

「きやつ!?」

驚いた紗夜は思わず一步引いた。

「あつ、他にも絵があるんだ!……あはは! 何これ!？」

新たな背景ロールを目にした日菜が笑い出す。

「…………」

紗夜は黙つてその絵を見ていたが、日菜が笑つたことに納得できていた。新たな背景ロールには、アイドルと思われる女性五人組が歌つて踊つている様子が描かれていた。先程の神秘性を感じる地球の絵に対し、このアイドルの絵はコミカルに描かれており、そのギャップに笑つてしまふのも無理はないと、紗夜は納得していた。「真ん中にいる人、彩ちゃんに似ている！ 隣は友希那ちゃんかな？ 猫耳付けててかわいい！」

日菜は楽しそうに絵を眺めている。

「——おつ、やつと起きたか」

部屋に士が入つてくる。

「門矢さん、心配をおかけしてすみま——せ、ん！」

紗夜は士の方を向いて謝ろうとしたが、突然彼女の顔が真っ青になる。

「おいおい大丈夫か？ 顔色悪いぞ。もう少し休んだらどうだ」「な……なんですか？」

「その格好は!?」

紗夜は士の服装を見て、背筋を凍らせていた。

「は？ 何を言つて——つて……なんだこれ？」

自分の服を馬鹿にされたと思った士であつたが、自分の服に目を向けると怒りが困惑に変わつた。

士は何故か——ドルオタがライブやコンサートで着てくるような法被を身に纏つていた。

序章 完

# 第一章 クウガの世界（戦う理由、守る理由）

## 第五話 変わった世界、変わった人たち

「なんだこれ？」

士は、法被を身に纏つた自分の姿を見て戸惑つたが……

「——何を着ても俺は似合つてゐるな」

「…………」

謎の自信を見せる士に、紗夜は呆れて何も言えなかつた。

「確かに似合つてる！ そういう顔してるとん！」

日菜は士に同調した。一応同調しているつもりである。

皮肉を言つているようにしか聞こえないが。

「フツ、だろ？」

士は謎のドヤ顔を決める。

——ピンポーン！

「？」

すると、家のチャイムが鳴る。

士は部屋を出て、廊下を歩いて何の躊躇いもなく玄関の扉を開ける。

「悪いが、この家の主は今——」

「「「おはようございます!! 隊長!!」」

「?」

今の士と似たような格好をしている男四人が訪れた。

気迫のある挨拶に驚いた士は思わず身を引く。

「今日は待ちに待つた『クインティップル』のライブツす！」

「お、おい！ 何言つてんだお前ら!?」

「寝ぼけてるんですか隊長？ この日を一番楽しみにしていたのは隊長ですよ！」

「行きましょう！ 早く行かないと席が取られるツす！」

男四人は、困惑している士を持ち上げるようにして無理矢理運んでいく。

「……一体何がどうなつてているの？」

後ろで様子を見ていた紗夜は、状況を理解できなかつた。

「あれ？」

彼女の隣にいた日菜が玄関を抜け、外を眺める。

「街の風景変わってない？」

「何を言つてるの？」

紗夜も外に出て確認する。

「？」

紗夜は、日菜の言つてることを一瞬で理解した。

本来住宅街の中にあるはずだった司の家が、大通りの一角に立つていた。更に、街を歩く人の殆どが、士が着ていたような法被を身に纏っていた。

「……何がどうなつてているの？ まるで別世界に——」

言葉の途中、紗夜は司に言われたことを思い出す。

——この世界にいる、もう一人の俺と旅をしてほしい——

——他の世界——九つの世界を。そして世界を繋ぐんだ。さもなくば、全ての世界が消滅してしまう——

(……本当に、別世界へ来てしまつたの？ でもどうやつて？ 部屋にあつたあの絵と関係があるの？)

紗夜が考へていると、日菜は自分のポケットに何か入つてゐることに気づき、取り出

す。

「クインティップル……一周年記念ライブ……？」

出てきたものは、二枚のチケットであった。

「おねーちゃん！ ひとまずこれ行つてみない？」

日菜は考へている紗夜の目前にチケットをかざす。

紗夜はチケットを一枚手に取り、詳細を確認する。

「これは、先程の男達が言つていた……しかもS席。日菜、これはいつ手に入れたの？」

「わかんない。買つた覚えもないし、気が付いたらポケットに入つてた」

「……怪しいわね。今すぐ——」

捨てようと、紗夜はチケットを破ろうとする。

「待つて！」

日菜は紗夜の両手首を掴んで阻止する。

「行つてみようよ！ 何か手がかりが掴めるかもしないし！」

日菜が真剣な表情を見せてくる。

「…………」

日菜は普段から脳天氣で突拍子もないことを言い出すのだが、何も考へていかないわけではない。純粹無垢なため、本人からすれば全て真剣に考へて動いているのだ。

そんな彼女が、アイドルのライブへ興味本位で行くのではなく、変わったこの世界についての情報を集めるために行こうと言っているのだ。

「……わかつたわ」

「やつたあ！ おねーちゃんありがとう！」

日菜は喜びのあまり紗夜に抱きつく。

「一々抱きつかない！」

「えつと場所は……」

紗夜の注意も聞かず、日菜はチケットを見て場所を確認する。

「CIRCLEだつて！ 行こー！」

「えつ、CIRCLE!？」

※

「なるほど、大体わかつた」

CIRCLE内——会場ギャラリーにて。

最前列にいた門矢士は、謎のアイドル親衛隊からこの世界の情報を得ていた。  
「俺は『クインティップル』親衛隊の隊長で、推しメンは『丸山彩』つと——」

『ちゃん』をつけてください『ちゃん』を！ そういういつも隊長が言つてるじゃないですか？！」

「隊長、今日調子悪いんですねか!?」

親衛隊の男二人から心配される士。

（この世界の俺はドルオタなのか……にしても、肝心の『この世界の俺』はどこにいるんだ？　俺が来たことで上書きされたのか？　そもそもどうやって世界移動を――）

『間もなく、『クインティップル』の登場です』

会場内に流れるアナウンスとともに、ギヤラリーから一斉に野太い歓喜の声が上がった。

「……すごい熱気ね」

ギヤラリーの後ろの方にいる紗夜と日菜。

紗夜は腕を組んで、日菜はウキウキと体を揺らしながらコンサートが始まるのを待つ

一  
九

みんなー!! お待たせー!!

ステージにアイドル五人組『クインティップル』が入場してくる。

ギャラリーから更に歓声が上がる。

士はそれを鬱陶しそうにしつつアイドル達の方を見る。

戸山香澄だよー!!

猫耳——ではなく、星の形を模した髪型をしている少女——戸山香澄。

元の世界では、『Poppin' Party』、通称ポピバのボーカルを務めている。この世界では『クインティップル』のリーダーを務め、『カスミン』という愛称で呼ばれている。

(戸山さんは変わらなさそうね)

紗夜が安堵するのも束の間――

「ほんにや元気にしてたかにや〜? みんなの子猫! 湊(みなと)友希那(ゆきな)だよ! やん!」

14

きにやああああああああああああああああん!!!  
?!透明感のある紫色の髪をした、頭に猫耳をはめ、  
夕を放つ少女——湊友希那。

१०

?!?!?!彼女の姿を見た瞬間、紗夜は目を疑うように見開かせ、開いた口が塞がらなかつた。それもそのはず、友希那はR o s e l i aのボーカル。

本来クールなはずの彼女が、猫のコスプレをしてアイドルらしい立ち振る舞いをしている。元の世界の彼女が見たら気絶してしまいそうだ。

「あははははは!! おもしろーい！ 元の世界に帰つたら送ろつと」

日菜が笑いながらスマホのカメラで友希那を撮る。

「皆あ!! いつも通り盛り上がつてるかあ!!」

「らああああああああああああああああああああん!!」

前髪に赤のメッシュが入つてゐる少女——美竹蘭みたけらんがロツクバンドの演奏前のMCつぽいことを言つたが、服装はアイドルらしいフリフリドレスであるため、言動とのギャップが強く表れていた。

元の世界では『Afterglow』のボーカルを担当している。

「……いつもよりテンションが高めですね。どちらかと曰いさんっぽいですね」

我に返つた紗夜が感想を呟く。

「ハローー！ 今日も皆いい笑顔してゐるわ！」

「こころおおおおおおおおおおおおおおん！」

身軽に前転、横転しながらステージに出てきた金髪の少女——弦巻つるまきこころ。

元の世界では『ハローー！ ハッピーワールド！』のボーカルを務めている。

「こころーん！」

日菜が歓声に合わせて声を出し、両手を大きく振る。

日菜が籠声に合わせて声を出し  
「まんまるお山に彩りを！」  
まるやまあや  
丸山彩でーす！」

ピンク髪のツインテールをした少女——丸山彩が両手に指鉄砲を作る変なボーズを決めている。

元の世界で『Pastelle\*Palette』、通称パスパレのボーカルを務めてい  
る。

一彩ちやあああああああああああああん!!

ギヤラリーから二つの歎声が聞こえてくる。

「おい！ 彩ちゃんに対して『丸山』なんて言い方は失礼だろ！」

「本人が公認してくれているんだからいいだろ！ これも愛称の一種だ！」

「丸山」と呼んだファンと、「彩ちゃん」と呼んだファンに亀裂が走る。

ネタにされていた。

変なコラ画像を作られたりしていたが、健気に努力する彩の姿に、次第にファンは本気で彼女を応援するようになり、気が付けば『クインティップル』の中で一番人気となつていた。

しかし、ネタにしていた時の呼称が『丸山』だつたため、ファンになつた今でもその呼び方をしている人がいる。一応彩本人は呼び方に関して気にしていないということをSNSで呟いたのだが、その呼び方は『彩ちゃん』を馬鹿にしているというファンの怒りを買い、度々対立しているのだ。

「なんで俺はこんな面倒くさいファンの一人なんだ……」

その様子を見ていた士が呆れたように上を向く。

「ここは隊長の出番です！　お願ひします！」

隊員の一人から頭を下げられる。

ファン同士の揉め合いに戸惑つている彩を見て、士は内心面倒だと思いつつも動く。

「おいお前ら、同じ推しメン同士なに争つてんだ？」

士は両手をズボンのポケットに突つ込みながら、揉めている男二人に近づく。

「あ、あなたは？！　クインティップル親衛隊隊長、門矢士！？」

「丁度良かった。隊長さん、彩ちゃんを『丸山』呼ばわりするこいつらにガツンと――」

「言う必要はないだろ。どつちも『丸山彩』を――ごほん、『丸山彩ちゃん』が好きであることに変わりはないんだからな」

「？」

士の言葉に、『丸山』派の男が驚愕する。『彩ちゃん』派の男が不満そうな表情をする。

「こいつらを許すんですか!?」散々彩ちゃんを馬鹿にしてきたこいつらを!?

「何があつたのか俺にはわからんが、たつた今彼女を愛している、という事実の方が大切なんぢやないのか？」

— 1 —

『彩ちゃん』派の男は、何も言い返すことができなかつた。

「この話はここで終わりだ。引きずつてたらせつかくのライブが台無しだからな。お前ら、盛り上げるぞ」

士が仲裁に入つたことで、場の雰囲気が元に戻つた。

(……自分勝手な人だと思つてたけど、案外周りのことを見ているのね。そういうところは司と同じね)

紗夜は司を思い出し、微笑んでいた。

Roseliaは過去に一度、解散の危機に陥っていた。

その都度、司が阻止しようと動いた。

Roseliaのメンバーでない彼の動きは、何の意味も成さなかつたが、それでも

止めようとした彼の優しさを、紗夜はちゃんと理解していた。

(きっと司は今、何かを一人で抱え込んでいるはず。今度は私が助けないと——！)

※

CIRCLEの外——。

『ボボビギスボバ?』

『ガンゾグン ギグボドグダザギベセダバ』

謎の言語を話す怪人が二体いた。

一体はクモ、もう一体はコウモリのような姿をしていた。

『ガンゴンバダヂゾ ボソゲダ、ゾンドグビ 『ベゴ』ビバセスボバ?』  
『パパサバギ。ゲゲルゼ ギンバゼビスド ビギダボドパ——』

話している途中、二体の前に一人の仮面ライダーが。  
怪人は驚きつつも、仮面ライダーの名を口にする。

『クウガ!!!』

## 第六話 戦いの記憶

「どんな笑顔にでも、幸せ来ちゃうよ♪」

CIRCLEのステージにて、五人組アイドル『クインティップル』が予定通りライブを行っていた。

彼女達は、代表曲である『クインティップル☆すまいる』を歌っていた。  
(曲は元の世界と変わらないのね)

周囲が盛り上がっている中、紗夜は腕を組み、黙つて彼女達を見ていた。

——主よ——

——救世主よ——

「!？」

謎の男の声が聞こえ、紗夜は周囲を見渡す。

——救世主よ、世界を守るのだ——

直接脳内に語りかけている感覚であつたが、紗夜は出入り口の方にその声の主がいるような気がし、無意識にこの場を去ろうとする。

「おねーちゃん? どうしたの?」

日菜が紗夜の肩に手を置いた。

「…………！」

ふと我に返る紗夜であつたが、出入り口の先に何かがあると確信していた。

「大丈夫。お手洗いに行くだけよ」

「そう? ならいいけど……」

日菜が不思議そうにしつつ、アイドルの方に顔を戻すと、他の観客同様に体を大きく動かし始める。

「…………」

それを確認した紗夜は、出入り口の扉を開け、会場を抜ける。

「!?」

紗夜は目を疑う。

抜けた先に広がっていた風景は、CIRCLEの受付ホールではなかつた。

夢で見た場所、同じ光景が広がっていた。

気が付くと出入り口も消えており、紗夜は別空間に飛ばされていたのだ。

「ここは……!?」

「戻つてきてくれたか、世界の救世主よ」

紗夜が戸惑つていると、一人の男が姿を現す。

茶色のチューリップハットとコート、眼鏡をかけた中年の男が、紗夜の前に立つ。

「あなたは……!?」

「私の名は鳴滝<sup>なるたき</sup>。君を『救世主』に戻すべく、力を貸したいんだ」

鳴滝と名乗った男は、一つの変身ベルトを紗夜に差し出す。

「……!?」

差し出された変身ベルトは、士が使用していた『ディケイドライバー』と似ていた。バツクルが青紫色で、上にカメラのシャッターボタンのようなものがあつた。

「これがあれば君も戦える。『司』の力になれる！」

「司の……力に……!?」

鳴滝の言葉を聞いた紗夜は、ベルトを受け取ろうと手を伸ばす。

「!?」

横から銃声が聞こえると同時に、身の危険を感じた鳴滝が瞬時に後ろに飛び、

飛んできた弾丸は鳴滝の前を通り抜ける。

遅れて反応した紗夜が左を向く。

「——良かつた、まだ渡つてないみたいだな」

革ジャンを着た、やや高身長の青年が、手形の付いている変わった銃を持つていた。  
〔操真<sup>そうま</sup>晴人<sup>はると</sup>!! 生きていたのか!?〕

鳴滝が驚いた顔で青年の名を叫んだ。

(操真、晴人……どこかで聞いたことがある気が……)

「おいおい、勝手に殺されちゃ困るね」

「……何がともあれ、邪魔をしないでくれ！ 彼女には『救世主』として『世界の破壊者』を倒してもらわないといけないのだ！」

鳴滝が叫ぶと、彼の目の前にオーロラのような靄が発生する。

その靄から、二人の仮面ライダーが出てくる。

バッタに似た姿をする『仮面ライダーキックホツパー』と『仮面ライダーパンチホツパー』が。青年——晴人に向かってゆっくりと歩き出す。

「悪いが断る。司と約束したからな」

晴人は銃を左手に持ち、右手を前腰に当てる。

『ドライバーオン！』

謎の音声が鳴り響くと同時に、晴人の腰に変身ベルトが出現する。

表面に黒い手形がついた奇妙な変身ベルトである。

晴人は左右のハンドルを操作し、手形の向きを変える。

『シャバドウビタツチヘーンシーン!! シャバドウビタツチヘーンシーン!!』  
ベルトから非常にうるさい音声が流れ出す。

「——行くよ、燐子ちゃん」

晴人は銃を右手に持ち直しつつ、左手の中指に青紫色の仮面が付いている指輪をはめ、ベルトの手形に左手を添えた。

『レクイエム!!!』

『プリーズ!!!』

ベルトから声が枯れそうな程大きな声で叫ぶ。

ピアノの旋律が流れ、幻影の少女が彼の前に立つ。

「え……白金……さん…………!?」

その幻影に顔がなかつたのだが、何故か紗夜はR o s e l i aのキーボード担当——白金燐子であるように思えた。

幻影が晴人に抱きつくように彼と一体化し、青紫の結晶が彼の体を包み込む。すると、彼の体が光り出し、結晶が粉々に碎け散ると同時に変身した姿を現す。

黄金のコートに、宝石のように美しい青紫のマスクと鎧を纏つた、『仮面ライダーウイザード レクイエムスタイル』へと変身を遂げた。

碎け散つた結晶は、彼の右手に吸い込まれるように集まり、一つの大剣を生成する。柄に鍵盤が付いている変わった武器だ。

「——行くぜ、相棒」

「兄貴となら、どこまでも」

変身した晴人に動じることなく、『キックホッパー』と『パンチホッパー』はベルトのボタンを押す。  
『CLOCK UP!』  
『<sup>ク</sup><sub>ロック</sub>ロッ<sup>ク</sup><sub>ク</sub>アップ』

音声がなると同時に、二人が目で追えない速度で動き始める。

「ふっ!!」

晴人も難なく二人の速度についていき、激闘を繰り広げる。

「今之内にこれを!」

その隙を狙つて鳴滝はベルトを紗夜に渡そうとする。

「何!？」

だが、仮面ライダー二人を呼び寄せた謎のオーロラが紗夜の目の前に現れ、鳴滝の行く手を妨害する。

「おのれデイケイドオ!!」

鳴滝の叫びが聞こえると同時に、オーロラが紗夜を通り過ぎる。

紗夜は思わず目を伏せるが、特に痛みもなく、目を開けるとCIRCLEの外に出ていた。

(……さつきのは一体……?)

紗夜は漠然とその場に立ち尽くしているが――

『グア!!』

戻った先も戦場であつた。

コウモリのような怪人が、クワガタのような頭に赤い鎧を身に纏つた『仮面ライダークワガ』に殴り飛ばされていた。

「!? どうしてここに人が!?」

突如その場に現れた紗夜に、クワガは戸惑う。

仮面越しからは青年の声が聞こえた。

『グア!!』

クモのような怪人が、その隙を狙つてクワガに攻撃を仕掛ける。瞬時に我に返つたク

ウガは怪人の攻撃をかわし、怪人と向き合う。

「そこの人！　早く逃げて!!」

クウガはクモの怪人と拳を交えながら、紗夜に呼びかける。

しかし、それよりも先にコウモリの怪人が彼女の首を掴もうとする。

「！」

紗夜は身をスッと横に移動させて攻撃をかわした。

——攻撃を、かわせた。

コウモリの怪人は諦めずに何度も攻撃するが、紗夜は全てかわしてみせる。

(攻撃が見える……どう動けばいいかわかる……戦つたことなんてないのに……！)

紗夜はかわすだけでなく、隙をついて怪人の脇腹に蹴りを入れる。

『ガア!!』

コウモリの怪人が怯んだ後、激昂したように叫び、先程よりも素早い速度で紗夜に飛びかかる。紗夜はかわすが、間も空けずに攻撃する怪人に対し防戦一方だつた。

その状況を把握したクウガが助けに行こうとする。

『バア!!』

「くッ！」

クモの怪人が吐いた糸が右腕に絡み、クウガの行く手を阻んだ。

「クソッ！」

力尽くで糸を千切ろうとするが、頑丈でビクともしなかつた。

「!?」

そこに、一発の弾丸が飛んでいき、クモの糸を切つた。

クウガが飛んできた方を向くと、『仮面ライダーデイケイド』に変身した士が立つていた。

「なるほど、ここはクウガの世界か……にしても、紗夜があそこまでやれるとはな」

コウモリの攻撃を無駄のない動きでかわしている紗夜に関心を持ちつつ、コウモリに向かってガンモードのライドブツカーで撃つ。

弾丸を受けたコウモリはその衝撃で後ろに倒れる。

「おねーちゃん！」

士の後ろにいた日菜が、紗夜の元へ走る。

「日菜!?」

「おねーちゃんトイレにいなかつたから、もしかしたらまた怪物に襲われているかもつて！」

日菜が紗夜の腕を引っ張り、士の後方に回る。

日菜は紗夜が中々トイレから帰つてこないことに不安を感じ、様子を見に行くと予感

通りトイレにいなかつた。元の世界で怪物が現れたことを思い出し、この世界でも怪物がいる可能性があると思った日菜は、士に助けを求めたのだ。

中をくまなく探した後、外に出て紗夜を発見。そして今に至るのだつた。

「さて、ならばこれを使——」

士はライドブツカーを開き、カードを取り出して新たな姿へ変身しようとすると——

「……どういうことだ!?」

## 第七話 彼は今——

「……どういうことだ!？」

カードを手にした士が困惑する。

士が戦闘で使用するカードには、仮面ライダーの姿や紋章などが描かれている。しかし、それに白い靄のようなものがかかり、消えかかっているように見えた。「なら——！」

他のカードなら——そう思った士であつたが、他のカードも同様の状態に陥つていた。

問題ないのは、『仮面ライダーデイケイド』に関連するカードだけだった。

「くッ……！」

士はダメ元で『仮面ライダークウガ』だつたカードを、バツクルに挿入する。案の定、耳障りなエラー音がなり、吐き出されるようにバツクルからカードが飛び出る。

「ダメか……つと、よそ見してた場合じゃないな」

士は飛び出たカードを手にしながら、不意打ちを狙つたコウモリ怪人の攻撃をかわ

す。その後、カードをライドブツカーに戻し、ソードモードにしてコウモリ怪人に攻撃する。

「なんだ、あいつは——って、おつとつと！」

謎の仮面ライダーの出現に混乱するクウガ。その隙にクモ怪人が攻撃するも、それに気づいたクウガがギリギリ回避する。

「超変身！」

クウガが身に纏う赤の鎧が、紫の鎧へ——『タイタンフォーム』へと姿を変える。

『グア!!』

その隙にクモ怪人は口から糸を吐き、クウガの体に巻き付けて拘束する。

「はあ!!」

クウガは頑丈に巻き付けられた糸をあつさりと引き千切り、クモ怪人に近づく。クモ怪人はクウガよりも早く動き、拳を彼の胴体に強く当てた。

『バ!?』

しかし、クウガは全く怯まなかつた。クモ怪人の攻撃が通じていなかつたのだ。それには驚いていると、クウガが勢いよくクモ怪人を殴る。

怪人は後ろに大きく飛び、CIRCLEの壁に凹みができる。

「あつ、やばッ!?」

あね 姐さんに怒られる……緊急時だし、なんとかなるよね?」

そう言いながら、クウガは近くに落ちていた木の棒を拾い、それを紫色の刀をしてい  
る剣——タイタンソードに変形させる。

クウガはクモ怪人が体勢を戻す間も与えず、タイタンソードで斬りつける。

『ガバア!!』

クモ怪人の体にクウガの紋章が浮かび上がり、爆発四散する。

「…………」

クモ怪人を倒したクウガは、コウモリ怪人の様子を見る。

コウモリ怪人は翼を広げて空を飛び回りながら、鋭い爪で士を引き裂こうとしていた。士は冷静に攻撃をかわし、ライドブツカー『ガンモード』で怪人を撃ち落とす。

「——これで終わりだ」

地面に落ちた怪人に体勢を戻させる間もなく、士はデイケイドの紋章が描かれた黄色のカードを取り出し、バツクルに挿入する。

『ファイナルアタックライドオ!』

ハンドルを内側に押し戻して、必殺技を発動する。

『デイディディディケイド!』

士の前方に彼の身長と同じくらいの大きさをほこるカードが十枚並び立つ。  
士が跳躍すると、それに反応してカードも浮き、怪物に向かつて斜め一直線を描く。

士は飛び蹴りの体勢を作り、カードを通り過ぎる。カードを通過する度に右足にエネルギーが蓄えられつつ、降下速度が上がっていく。

「ダア  
!!」

コウモリ怪物は起き上ると同時に、デイケイドの必殺技——『デイメンショーンキック』を叩き込まれる。

怪物は後ろに吹き飛びながら爆発を起こし、跡形もなく消滅した。

士は地面に着地し、ハンドルを弾いてカードを取り出し変身を解除する。

日菜が走つて土の元へ。彼女に続いて紗夜が歩み寄る。

「まつ、こんなところか。にしても紗夜、喧嘩慣れしてたのか？」

あたしも気になる！ 少し見たけど、お姉ちゃんスタントマンみたいな動きしてたよ

!

「喧嘩の経験なんて……」

ない——そう断言したかつた紗夜だつたが、頭の奥が刺激されるような感覚に陥る。

そして、頭の中にいつの記憶かわからない映像が流れる。

——変身!!

カメンライドオ！ デイ——

「あんた達、何者なんだ？」

「!？」

映像を遮るように、クウガが紗夜達に話しかける。

クウガは変身を解き、その姿を彼女達に見せる。

パークーを身に纏つた青年だった。

「そういうのは、自分の方から先に名乗つてみせるもんじゃないのか？」

などと偉そうなことを言う士であるが、初対面の人に対してカメラを向け、無断で撮っていた。

その様子に紗夜はため息を吐き、彼の代弁を務める。

「この人の名前は門矢士。仮面ライダーです」

「仮面……ライダー……？」

青年は仮面ライダーという言葉に疑問を浮かべる。

青年は一度も仮面ライダーと呼ばれたことがないのだ。

「ライダーに変身して戦う戦士のことです。あなたも、変身して怪物と戦っているのですよね？」

「あ、ああ……」

青年が困惑しつつも頷く。

(…………どうして説明できるのか、私にもわからないけど)

「申し遅れました。私は氷川紗夜です。こつちは妹の日菜です」「よろしく～！」

日菜は元気いっぱいの笑顔を見せる。

「俺は小野寺ユウスケ。クウガとして、グロンギと戦っている」「グロンギ？ 先程の怪物のことですか？」

「ああ、奴らは街に降りては人を襲っている。理由はわからないけど、最近は『クインティップル』に狙いを定めているみたいだ。俺はその護衛を――」

「ユウスケ！」

走りながら彼の名を叫ぶ女性がいた。その女性に見覚え合った紗夜と日菜が声を合させて驚く。

「まりなさん！」

「まりなさん!?」

走ってきた女性は、元の世界でCIRCLEのスタッフをしていた、月島まりなだつた。

「姐さん！」

ユウスケはまりなに何かを期待するように笑顔を向ける。

「はあ……はあ……ごめん、どうしても係の仕事から抜け出せなくて……大丈夫だつた？」

「大丈夫。このくらい楽勝！」

「俺の力もあつて——」

士が会話に割つて入ろうとするが、何かを察した日菜が彼の口を塞ぐ。

「？ ユウスケ、この人たちは？」

「グロンギに襲われそうになつた人たちだ」

「ユウスケさんが助けてくれたんだ！ ありがとう！」

日菜が士の口を塞いだままユウスケにお礼を言う。

「？」

紗夜は、日菜の行動理由がわからなかつたが、士が変なことを話すよりはマシと思い、放置することに。

「怪我はない？」

「怪我はありません。ユウスケさんにはどうお礼したらいいのか——」

「大丈夫！ 見返りは求めてないから！」

ユウスケは爽やかに返した。

「他に被害は…………あ、あ、!!」

周りを見渡したまりなは、凹んだCIRCLEの壁を見て変な声を上げる。

「またCIRCLEがあ!!」

(この世界でも、CIRCLEは被害を受けているのね……)

「ごめん姐さん！ わざとじゃないんだ！」

ユウスケは頭を下げて必死に謝る。

「うう……弁償代、支払わないと……」

まりなは涙を流しながら膝を落とす。

すると、まりなの携帯から着信が入る。まりなはズボンのポケットから携帯を取り出し、電話に出る。

「もしもし、まりなです……えつ!? またですか?! ……わかりました！ すぐに向かわせます！」

まりなが電話を切り、立ち上がつて真剣な表情でユウスケに告げる。

「駅前広場に新たなグロンギ！　すぐに向かつて！」  
「了解！」

ユウスケは近くに停めていたバイクに乗り、現場へと向かつていった。  
まりなも彼の後を追おうと、自分の車に乗る。

「――あつ！　CIRCLEの仕事すっぽかしてた！　うう……いや、ユウスケに何か  
あつてからじや遅い！　私も行かなくちや！」

まりなは車を発進させ、この場を去つて行く。

「……私たちも向かいますか？」

紗夜が提案を出すと、士が日菜の手を強引にどかして答える。

「いや、後はあいつに任せれば問題ないだろ。俺たちは俺たちのやるべきことをやるぞ」

「？　何するの？」

日菜が不思議そうな顔を浮かべる。

「この世界でやるべきことを探す。ついでに、もう一人の俺も探す」

「？」

士の思いもよらない発言に、紗夜は驚く。

「さ、探してくれるんですか!?」

「ああ、もう一人の俺がどんな奴か、気になるからな。ひとまず、家に戻るぞ」

※

「…………」

崩壊した街の中――

司は一人で歩いていた。

彼の体には、誰かの返り血が大量についており、右手には『ソードモード』の『ライドブツカー』が持たれていた。その『ライドブツカー』はカードが収納されている箱部分がやや大きくなつており、その箱にデイケイドライバーと似たレンズとカードの挿入口が付いており、また箱の表面に長方形の『何か』をはめるための凹みがあつた。

彼はもう、これを『ライドブツカー』と呼んでいなかつた。

「相変わらず無茶をするな」

司に声をかけながら、一人の青年が物陰から出てくる。

「……晴人」

「ディターミネイションドライバー、見つかつたのか?」

青年――晴人が尋ねると、司は首を横に振る。

W<sup>ダブル</sup>

オーズ

フォーゼ

ウイザード

ガイム

鎧武

ドライブ

ゴースト

エグゼイド

これまで八つの世界に回つたが、どの世界にもなかつた』

『『ネクスト・ワールド』も、残るはビルドだけか……』

「……」

ビルド——その言葉を聞いた二人は、かつての戦友を思い浮かべる。

「……ビルドの世界、行くなら俺も行く」

晴人は司に歩み寄り、彼の肩に手を置く。

「俺が生きてたんだ……一海も、その世界に飛ばされて生きてる可能性はある」

「……そうだな。けど——」

司が前方の奥に目を向ける。

彼の視線の先には、三十体の怪物がいた。

人の肉片をかき集めて作られたような、気持ち悪い怪物だ。

「まずはこいつらを倒す！」

司は変身せず、生身のまま怪物の群れに突っ込み、斬り倒していく。

怪物達も反撃するのだが、司に攻撃がかすることなく、端から見れば彼が一方的に怪

物を殺しているように見えた。

「…………」

三十体もいた怪物が、僅か数秒でただ地面に転がる肉片と化した。

怪物の返り血を浴び、更に赤く染まつた司の体。

もう、紗夜の知る『司』は、どこにもいないのかもしれない——。

## 第八話 謎は増え続ける

「——ただいま」

日が落ちる頃——

士、紗夜、日菜は写真館に戻ってきた。

「まずは背景ロールがある奥の部屋だな」

士と紗夜がせつせと奥の部屋へ歩く。日菜はのんびりと周囲を見渡しながら二人の後を追う。

「私たちが別世界へ来た原因は、おそらくこの背景にあります」

奥の部屋に着いた三人。紗夜は、背景ロールに手を触れる。

「……悪趣味な絵だな」

「そう？　あたしはいいと思うけどなー？」

「誰がこれを描いたのか、気になりますね」

「他にもありそうだよね？」

日菜は背景ロールの隣にある紐を引いて、背景を切り替えようとする。

「んう！　……あれ？　んう！」

日菜は何度も紐を引くのだが、絵はビクともしなかった。

「おつかしいなあ……お姉ちゃんの時は絵に触れただけで落ちてきたのに……」

「――なるほど、その絵が別世界への移動手段であれば、この世界で何かを成し遂げないと移動できなってことか」

士はライダーカードを見ながら言う。

「そのカード、使い物にならなくなつたんですか？」

「いや、また使えるようになるはずだ。そんな気がする」

士はカードをしまいながら、部屋を抜ける。

紗夜と日菜は自然と彼の後を追う。

「次はここだな。恐らく普通のリビングだと思うが」

士は隣の部屋へ入る。

その部屋は、リビングとダイニングキッチンが一緒になつた広々とした部屋だつた。

「……普通だな」

「普通ですね」

「ここにに関しては俺の記憶にある部屋と変わらん。ひとまず別の部屋を当たるか。次は二階だな」

士と紗夜は部屋を抜けようとする。だが、日菜はなぜかキッチンの棚を漁つていた。

「……日菜？」

「ちよつと気になるものがあつて」

日菜は棚から白いマグカップを八つも取り出し、テーブルに並べる。  
「何をやつて——これは……!?」

紗夜は余計なことをする日菜を叱ろうとするが、マグカップの表面を目にした瞬間背筋が凍り、その場で硬直する。

その様子が気になつた士は、マグカップの前まで歩いて確認する。  
「……なんだこりや？」

白いマグカップの表面に、それぞれひらがなで人の名前が書かれていた。

つかさ

さよ

ひな

だいき

はると

りんこ

かずみ

あや

[REDACTED]

殆ど知っている人の名前であつたことに、紗夜は恐怖を感じた。

それと同時に、名前の中に『はると』があつたことに疑問を抱く。

（「はると」……あの時いた、操真晴人のことなのかしら？　私と日菜、司の他に白金さんと丸山さん？　残りの『だいき』と『かずみ』は誰なのかしら？　そもそも、どうしてこんなものが――）

「つ!?」  
紗夜は考えながら、無意識の内に自分の名前が書かれたマグカップを手に取る。

その瞬間——謎の記憶がフラツシユバツクする——



八人の男女がダイニングで食事を取ろうとしていた。しかし、食事と言うには貧相で、ご飯とツナ缶だけだつた。

「……流石に飽きてきたなあ」

日菜がもぐもぐ食べながらも、この食事に不満を告げる。

「日菜、わがまま言わない」

紗夜が子供を躊躇るように言う。

「ええ！ でもそろそろ別のもの食べたいよおー！ 彩ちゃんもそう思うよね？」  
「えつ、えつと……」

少し長いピンクの髪を肩にかけた彩が、返事に困つて目を泳がせる。

そんな彼女に対し、茶色のジャンパーを身に纏つた男が笑顔で口を開く。  
「あやたん、欲しいものがあつたら何でも言つていいんだぞ……この猿渡一海さわたりかずみ、二十九歳  
独身があなたのために命をかけ——いてツ！」

彼の前に座つていた黒髪の青年が、男——一海の片耳を引っ張る。

「なにすんだよ大根！」

一海は彩に見せた笑顔が嘘のように、青年の手を解いて鋭い目線を向ける。

「いや、ただムカついただけ」

「それだけでかよ！」

「それと僕の名前は大樹だいきだ。ちゃんと覚えたまえ」

「大根も変わらないだろ！」

「まあまあ落ち着けって」

「一人の間に入ってきたのは、操真晴人。

「なんにせよ、食料が少なくなつてきてる。そろそろ調達しないとな」

「わーい！ 遠足だー！」

日菜が席を立ち、両腕を挙げて喜びを表す。

「日菜！ 遊びじゃないのよ！」

「わかってるつて！」

「でも……どこへ行くんですか？」

疑問を口にしたのは、透き通つた長い黒髪をした少女——白金燐子。

「近くのスーパーはもう、殆ど行きましたから……」

「次行くとなると、ショッピングモールだな」

晴人が行き先を提案するが、不安な表情を浮かべる。

「ここから遠いから、『リコルド』との戦闘は避けられそうにないが——」

「——行こう」

すぐに覚悟を決めたのは、司だつた。

「どうあがいても、俺たちに戦い以外の選択肢はない。『アイツ』を倒さなければ、俺たちに未来はない」

その場が一瞬沈黙に陥った後、一海が口を開く。

「だな。にしても司、お前逞しいこと言うようになつたじやねえか！」

「そうか？」

それに対して反応したのは晴人。

「こいつは内気だつただけで昔から根性と変な度胸はあつたからな。 そうだろ、紗夜ちゃん」

「ええ、そうね——



「おねーちゃん?」

「!」

ふと我に返った紗夜。

「おねーちゃん大丈夫？ 具合悪い？」

「え、ええ……大丈夫よ」

(今のは何……？ 私は何を見せられたの……！?)

「本当に大丈夫なのか？」

再び棒立ちになる紗夜に、士が心配そうな顔を見せる。

「!? 問題ありません。次行きましょう」

紗夜はせつせと部屋を抜け、二階へと向かう。

「待つてー！」

日菜がその後を追う。

「…………」

(…………まだ会つて間もない奴なのに、何故か放つておけない感じがする。まるで、彼女が妹のようだ――)

「…………」

「士さん、どうしたの？」

来ない士の様子を見に来た日菜が戻つてくる。

「いや、大丈夫だ。すぐ行く」

士は日菜の後を追い、二階へ上がる。

「!?

二階に上がった士は驚く。紗夜も信じられないような顔をしていた。

二階の廊下は広くない長方形のものであつたが、左右に扉が四つあつた。それぞれの扉に紙が貼られており、手前の左扉には『男』、右の扉には『女』、奥の左扉には『司』、右の扉には『紗夜』と書かれていた。

「私の……部屋……!?

紗夜は迷うことなく奥の右の部屋に入る。

「!?

彼女は更に驚き、恐怖を抱き始める。

その部屋の内装は、氷川家の紗夜の部屋とほぼ同じ内装だった。

その中で何よりも恐怖を感じた対象は、紗夜が愛用しているギターが置かれていることだ。

「あれ？　ここおねーちゃんの部屋？」

日菜が不思議そうな顔をしながら入ってくる。  
士も入ろうとするが――

「女性の部屋に無断で入らないでください！」

「おっと失礼。入るぞ」

「駄目です」

「許可取つてもダメなのかよ……」

と言いつつも、士は大人しく部屋の外で待つことに。

「…………」

紗夜は置いてあるギターを取り、家用の小型アンプに繋げて弾き始める。

(――このギターの感触……間違いない、私のギターだわ)

「ほう、中々上手いじゃないか。俺ほどじゃないがな」

外で聞いていた士がそう言つた。

「つ!? 言つてくれますね……なら、弾いてみてください。入るのを許可しますので」

紗夜は強気に出る。士は遠慮なく部屋に入り、彼女からギターを受け取つて弾き始め  
る。

「わあ～!!」

士の高速ギター・テクニックに、日菜は目を光らせる。

「…………」

士の演奏を目の当たりにした紗夜は、狼のように顔を険しくさせ、非常に悔しそうな

表情を作っていた。

ただ、険しすぎて女性がしてはいけない顔になってしまっているが。

「ふう…………」

弾き終えた土は、紗夜に対して謎のドヤ顔を見せる。

「……一つわかりました。あなたは間違いなく、私の知る『司』ではないと。次行きましょう」

紗夜は不機嫌そうに部屋を出て行く。

「…………司」



「うーん…………」

紗夜が日菜と和解し始めた頃――

紗夜の部屋に彼女と司がいた。

司は紗夜のギターを借り、彼女から弾き方を教わっていたが、思うようにいつてなかつた。

「いい音が出ないなあ…………」

「弦の抑え方が甘いのよ。左手はこうやつて——」

司の右隣にいた紗夜は彼に体を寄せ、彼の後ろに手を回し、彼の左手と重ねるように指の置き方を直接体に教える。

その時の紗夜の顔は非常に活き活きしていた。『土』の演奏を聞いた時の顔とは正反対。明るい笑顔を見せていた。

「?」

一方、司は緊張した顔をしている。

紗夜が彼の体に触れてきているからだ。

左手に重なった、紗夜の心地よい手の感触が――

右背中に当たっている、紗夜の柔らかい胸の感触が――

右耳に入ってくる、紗夜の細かな息遣いが――

司の男としての本能をくすぐっていた。

「……」

司は息を呑んで我慢する。

今、二人は紗夜のベッドの上に座っている。

やろうと思えばすぐにでも押し倒せる状況だ。

そもそも、異性を部屋に招き入れている時点では紗夜にもその気があるので――。

(駄目だ！ 抑えろ！ そもそも彼女は風紀委員だ！ そんなこと考える人じやないだろ！)

「——司？ 大丈夫？」

「えっ？ あつ、ごめん！ 教えてもらつてるのにぼうつとして——」「凄い量の汗を流しているわ。具合悪いの？」

「えっ？」

司は自分の頬に右手を当てるとき、手の平全体が濡れるほど汗を流していたことに気づいた。

「ごめん！」

司は焦り始める。大量の汗を流している自分の体に、わざわざ触れてまでギターを教えている紗夜に申し訳ないと思ったからだ。

司は彼女から離れようと立ち上がったが、彼女の左手が思っていた以上に力が入つていたため、バランスを崩してしまった。

「きやつ！」

司は崩れた勢いで紗夜を押し倒した。

「…………！」

「…………！」

互いに目が合い、置かれている状況に気づく。

「ち、違うんだ！ わざとじゃ――！」

「おねーちゃん！ 今テレビで――」

最悪のタイミングで、日菜が入つて來た。

「ちち、違う！ 日菜、これは――！」

「日菜！ しばらく入つて来ないでつていつたでしょ！」

「？」

紗夜が意味深な言葉を口にした。

紗夜は純粹に司との時間を邪魔されたくないため、日菜には事前にそう言つたのだが、日菜はそれを忘れていたのだ。

さらに、状況が状況。この場でそれを口にするということは、まさに一線を超えると言つているようにしか聞こえなかつた（紗夜はそんなこと考えていなかつたが）。

「…………」

死んだ魚のような目になつた日菜は、ゆっくりとこの場を去つて行き、一階の方へ降りていく。しかし、決してリビングに戻つたわけではなかつた。

「…………」

何事もなく終われるか。司と紗夜はしばらく扉の方を見る。

「?」  
「!」

戻ってきた日菜を見て、二人は戦慄する。

日菜は死んだ目のまま、チエーンソーを持つていた。  
どこにあつたのかもわからないチエーンソーを。

——ギュイーン!!

日菜はチエーンソーの紐を引き、起動させる。

「ちよ、待つて日菜！ ちゃんと話せばわかるから！ だからしまって！」  
す！！ 僕が悪かつたから——!!

だからしまって！

お願いしま

……その後、紗夜の説得によつて難を逃れた司。

彼がやむを得ず変身しようとしていたことを、紗夜と日菜は知る由もなかつた——



(……懐かしいわね、司が何を焦っていたのかわからなかつたけど)

過去の思い出に浸つた紗夜は、向いにある司の部屋に入る。

ごく普通の一般男子の部屋。

変わつたところがあるとすれば、壁に司が撮つたと思われる写真があるところだけだ。

「おい、許可なく勝手に入つていいのか?」

士が彼女の後に入つてくる。

「誰に許可を取ればいいのでしょうか? 彼の手がかりを探すためなら、やむを得ないことです」

「そうだが——つて、おい」

紗夜の話を聞きながら、本棚から写真アルバムを手にし、中を確認した士が顔をしかめる。

「もう一人の俺、趣味悪いな……」

「？」

士の発言が気になつた紗夜は、彼が手にしているアルバムを覗き込む。  
そのアルバム一面に、紗夜の写つた写真が収納されていた。  
どれだけめぐり続けても、紗夜に焦点を合わせた写真しかなかつた。  
「……何これ、流石のあたしでも引くわー……」

いつの間にか部屋に入つていた日菜が、別のアルバムを見ながら呟く。  
そのアルバムにも、紗夜の写真しかなかつた。

「？ その写真のどこがおかしいんですか？」

「？」

紗夜は特に表情を変えずに尋ねる。

それに対し士と日菜が驚く。

「んな、これを見てなんとも思わないのか!?」

「司には、私を撮つてもいいと許可してましたし、特に問題はないかと——」

「おねーちゃん……」

司のベッドの下から何かを見つけた日菜は、青ざめた顔で紗夜にそれを見せる。  
「その人を探すの……考え直してみない……？」

1?

日菜が見せてきたものに、流石に紗夜も驚いた。

彼女が手にしていたものは成人向けの漫画——世間で言う『薄い本』だ。その本のタイトルは『乱れる風紀委員』

一  
ふ  
ツ  
!!

それを見た士は思わず吹き出した。

「大体わかつた。もう一人の俺は変態だな！」

士は笑い、膝を叩く。

「まさか、司が破廉恥な本を持つていたなんて……」

紗夜は日菜から漫画を奪い、中身を確認する。

[...]

風紀委員として怒るのかと思われたが、紗夜は何事もなかつたかのように漫画を閉

じ、ベッドの下に戻し、こう言つた。

「ま、司も男ですし、仕方ないですね」

「ふふっ、ふはははははははははははははは!!」

日菜が驚愕の声を部屋全体に響かせる。

士は笑いのツボを押されたかのように、腹を抱えて爆笑し始める。

「おねーちゃん大丈夫!?」  
具合悪くない!?

？」

平氣つて！ おま！ 紗夜つて実は——あははははははは！！

士は笑いが止まらなくなり、横に倒れながらも笑い続ける。

……おねーちゃん、もしかしてその人のことが――

田菜が言いかけたところで、玄関の扉が開く音がした。

!?

その微かな音を聞き逃さなかつた三人は、先程まで賑わつていたのが嘘のように真剣な表情となり、緊張感を走らせる。

しばらくすると、聞き覚えのある声が下の方から聞こえてくる。

「あれ？ ここつて喫茶店じやなかつた？」

第九話 意外な訪問者

「あれ？ ここつて喫茶店じやなかつた？」

「おかしいわね……道を間違えたかしら？」

司の自宅である写真館に訪れたのは、小野寺ユウスケと月島まりなの二人だ。

潰れたのかな？」

ユウスケが周囲を見渡しながら言つた。

「（）写真館つぽそうだし、ひとまず別の場所に行きましょ」

「そうだね」

二人は別の喫茶店に行こうと扉を閉めようとした瞬間——

家の中から少女の叫び声が聞こえてくる。

1?

「!?

それを耳にしたユウスケとまりなは扉を閉める手を止め、家中を見る。すると、眉を寄せた日菜がチエーンソーを持って玄関の方にやつってきた。

「うわああああああああああああああああ!!」

「きやああああああああああああああ!!」

ユウスケとまりなは恐怖のあまり腰を抜かす。

突然チエーンソーを持った少女が現れれば、恐れを抱くのも無理はない。

「止まらないと、ギュイーンするよ——って、なーんだ」

日菜が安心した顔でチエーンソーを床に落とす。

「ユウスケさんとまりなさんかー。でもどうしてここに?」

「な、何なんだよ! お前!?」

「あたし? 日菜だよ。氷川日菜。自己紹介してなかつたつけ?」

「日菜!!」

上から紗夜の怒号が聞こえてきた後、彼女が玄関まで降りてくる。

「何をして——つて、ユウスケさんとまりなさん!」

「本当にすみません。うちの妹が大変迷惑をおかけしました」

紗夜は、ユウスケとまりなをリビングに招き入れ、頭を下げて謝った。  
日菜はリビングの床に正座させられていた。

「や、やんちゃな妹だね……」

ユウスケはまだ恐怖に震えながらも、紗夜が入れるコーヒーを飲む。

彼はクウガとしてグロンギという怪人と戦つてきてるのだが、日菜にはグロンギとは別の異質さを感じ、それが恐怖と化している。

「ふ、二人はここに住んでいるの？」

まりなが部屋を見渡しながら尋ねる。

「はい、一時的ではありますが、今はここが拠点ですね」

「一時的？」

「ここは、私たちの家じやないんです。もとい、家主は現在行方不明ですけれども……」

「行方不明！ 一体何が——」

驚くユウスケの隣に、いつの間にか姿を見せた士がカメラで彼を撮る。

士はまりなの方に回り込み、今度は彼女を撮ろうとする。

まりなはノリノリでセクシー・ポーズを決める。

「門矢さん！ 勝手に人を撮るなど何回も言つているでしょう！」

「うるさいなあ……あと、言われたのはこれで二回目のはずだが」

士は紗夜の注意を無視して撮り続ける。

「駅前のグロンギは倒せたのか？」

士はユウスケに馴れ馴れしい感じで聞く。

「当たり前だ！俺はクウガだからな！」

「……なら安心だ。そつちは任せられるな」

「『そつちは』って……あなた——門矢くんは戦えるの？」

「!」

何かを察知した日菜がバッタのように士に飛び込み、彼の口を塞ごうとする。  
だがその動きを読んでいた士は彼女の腕を抑えながら、まりなに話す。

「当然だ。俺も仮面ライダーだからな」

「仮面ライダー？ それって、ベルトを使って変身する人のことだつたりする？」

「ああ、その通りだ」

まりなは喜びを顔に出し、立ち上がる。

「あなた、ユウスケとコンビを組まない？」

「コンビ？」

「ユウスケは今まで一人でグロンギと戦ってきたわ。私はか弱い乙女だから、ただそれ

を見守る事しかできないけれど、あなたが一緒に戦ってくれれば、少しでもユウスケの負担が――」

「――断る」

そう言つたのは士――ではなく、ユウスケだつた。

「えつ…………？」

予想外の言葉に、まりなはユウスケの方を向き啞然とする。

「そいつには少し恩がある。だが、それは別の機会に返す。グロンギと戦うのは俺一人で十分だ」

「ユウスケ、何言つてるの!? 敵が強くなつてきてる今、あなた一人じゃ不安なのよ

！」

「それつて、俺が弱いつて言つてるのか?」

「違うわ! ユウスケが強くなかったらクウガなんてやつてられないじゃない! でも、あとどのくらいいるかもわからない敵を、今後も一人だけで戦っていくのは無理があるわ! だから――」

「ツ!!」

まりなの言い分が気にくわなかつたユウスケは、逃げるようになにこの場から走り去る。

「ユウスケ!!」

まりなはユウスケを追いかける。部屋を出る時、紗夜達に向かつて一礼してからユウスケの後を追い始めた。

「あーあ。行つちやつたね……」

日菜が悲しげな顔を浮かべ、紗夜の隣に座る。

「おい日菜、どうして俺の発言を妨害しようとしたんだ?」

「うーん……なんか、ユウスケさんから昔のおねーちゃんに似た感じがあつたんだよね」

「私と?」

紗夜が疑問を顔に浮かべる

「うん。なんかこお……『一人で抱え込んでる』つてよりは『一人で抱えたい』つて感じがしてー……うーん、なんて言えば……」

「——大体わかつた」

日菜が何を言おうとしていたのか、土は理解できた。

「要するに、誰かに褒められたい、承認欲求の高い奴つてことか。だが日菜、それを最初に言つてほしかつたな」

「ごめんごめん! 動いた方が早いかなーって!」

「…………」

紗夜が一人思い詰める。

(日菜、昔の私を見破っていたのね……けれど、その私は日菜の知っている『私』。司を知らない『私』。けれど……実際、司を知ってる私も、同じだつたわ。

日菜は私と同じことをやつては、軽々と私を超えていく。私の努力を踏みにじるかのように軽々と。皆が日菜の方に目を向けて、私のことなんて――。

でも、司だけはちゃんと私を見てくれた。私を撮ってくれた。だから私もそれに応えようとした。努力する理由がそれだけでもいいと思った。それも、間違いだつたけれど……)

「さて、探索を再開するか」

「追いかけないの?」

「俺らが口を出したところで悪化するだけだ。解決するなら二人で話し合うのがベストだな」

士は部屋を抜け、二階へと上がっていく。

「行こ、おねーちゃん!」

「ええ」

二人もその後を追う。

「さて、問題の部屋二つに入るとするか」

二階に上がった三人は、『男』と書かれた紙が貼られている扉の前に立っていた。

「客用の部屋かな？」

「入つて確かめるか」

士が扉を開け、中に入る。

中は散らかつており、特に丸山彩のグッズが多かつた。

「彩ちゃんのファンが使つてたのかな？」

「汚らわしい部屋ですね。日菜もこういうファンには気をつけないさい」

「はーい！」

日菜は元気よく返事をするが、士は首をかしげる。

（もう一人の俺も大概だろ……）

「……もう一人の俺に関する物はなさそうだな」

部屋を漁り終えた士が言う。

「ねえー、これなんだろー？」

だが、日菜はある物を見つけ、紗夜と士に見せる。

「それは……ゼリー飲料？ それにもしても小さいように見えるけど」

「うーん……どこにも賞味期限書いてないし、回しても引つ張つても蓋が取れないよお

！」

「変な物は開封するな。 そちら辺に投げておけ」

「はーい！」

士に言われた通り、日菜はゼリー飲料らしきものを投げ落とした。

「次行くぞ」

士たちは部屋を出て、『女』と書かれた部屋へ入ろうと――。

「……俺はここで待つ」

紗夜に怒られることを察した士は、部屋に入らず外で待つことを選んだ。

「よろしい」

紗夜は微笑みを浮かべながら、日菜とともに部屋の中へ入る。

部屋の中は綺麗——と思いまや、先程の部屋以上に散らかっていた。

「ここ」の住民はだらしない人ばかりなのかしら？」

「あつ!!」

何かを見つけた日菜が、それに飛び込むように走る。

「私のギター!! どうしてここに!?」

疑問に思いつつも、日菜はギターを手に取つて弾き始める。

アンプなど繋げていなかっため、音に迫力はなかつたが、紗夜に負けない弦さばきを見せる。

「ほう……紗夜より上手いじゃないか」

「っ!!」

士の発言に、紗夜は鬼のような凶相を浮かべ、強く拳を握る。

「……なんでこんなやつが『カドヤツカサ』なの…………!!」

「なんか言つたか?」

「いえ、何も!!」

「? そうか」

「おねーちゃん、大丈夫?」

「問題ないわ、手がかりを探すわよ——」

「……結局、何もなかつたな」

全ての部屋を探し終えた三人はリビングにいた。

三人はあの後、念のため一階のトイレ、風呂場、洗面所なども探したが、どこにも彼の居場所を特定できるものはなかつた。

「俺と性格が真逆なら、日記をつけてそだつたんだが、それらしき物もなかつたな」士は偉そうな態度でソファーの上で横になつていた。

「はあ……疲れた……」

日菜はテーブルに突つ伏している。

「…………」

落ち着かないのか、紗夜はテーブルの近くで突つ立つてゐる。

「あと、少し話は変わるが——」

士は横になつた状態で、複数の写真を手裏剣のように日菜が突つ伏してゐる後ろのテーブルへ投げる。写真は曲線を描きながらテーブルの上に落ち、綺麗に並ぶ。

「…………」

「…………」

写真には、主にユウスケとまりなの二人が写つてゐた。写真はどれも歪んでいたが、紗夜と日菜は特に驚くことはなかつた。

「さつき現像してきたが、このザマだ。どうやら、この世界も俺を拒絶しているみたいだ……さて、そろそろ晩飯にするか」

士は立ち上がり、キッチンの方へ足を運ぶ。

「あなた、料理を作れるのですか？」

「当然。俺にできないことはない」

自信満々に言つた士。しかし、冷蔵庫の中身を見て、険しい顔をする。

「おいおい、何もないじゃないか！ 仕方ねえ、買いに行くか」

不満そうな顔をしながら、士は家を出る。

「行つてらっしゃーい！」

日菜は元気よく手を振る。

「…………」

紗夜もどこかへ行こうと、部屋を出ようとする。

「おねーちゃん、どこ行くの？」

「少し、部屋で休んでくるわ……」

そう伝えて、紗夜は二階に上がる。

「…………」

二階に上がった紗夜は、自分の名前が書かれている部屋に入ろうとしたが、無性に司

の部屋が気になつていた。

紗夜は誰も見てないことを確認し、司の部屋へ入る。

「お邪魔します……」

紗夜は部屋を見渡した後、自分の写真が収納されているアルバムを取り出し、中を見る。

「……私、こんなに笑つてたのね」

殆どの写真に写る紗夜は、カメラに向かつて微笑みを浮かべていた。

「……これが全て私の写真だと考えると、確かに考え方ね。撮る対象のバリエーションを増やしてもらわないと」

紗夜は的外れなことを言いながらアルバムを本棚に戻す。

——ガチャ！ ガチャ！

本棚の上から、何かが二つ落ちてくる。

(そんなところから物が？ そういえば、私と司の部屋は詳しく調べないまま中断され  
ていたわね)

紗夜は下を向いてそれを確認する。

「えつ……どうして……!?」

信じられない物を見た紗夜は目を見開かせ、体を震わせる。

落ちてきたのは、真っ二つになつた緑色のデイケイドライバー。

——夢に出てきた、司の変身ベルトだつた。

# 第十話 戦士失格

「…………」

夜の公園。

そこのブランコに、ユウスケが座つていた。

ユウスケは写真館を抜けた後、近くに止めていたバイクを走らせた。まりなが自身の車で彼を追いかけたが、車が通れない小道を通り、彼女を巻いた。

しかし、彼女を巻いたからと言つて他に行く当てもなく、公園で一人途方に暮れてい るのだ。

ユウスケは、ブランコを軽く揺らしながら、下を向いて考える。

(姐さんは、両親に捨てられた俺を守つてくれた。これまで恩返しをしようと様々なこ とをしてきたけど、何一つ上手くいかなかつた。けど、クウガになつて戦うことだけは 違つた。グロンギを倒せば姐さんが喜ぶ。俺にはそれでしか姐さんを喜ばせられない。 もし、あの男が味方になつたら、姐さんは――！)

「……ユウスケさん？」  
「？」

彼に声をかける少女がいた。

「……彩、ちゃん？」

顔を上げ、少女の姿を確認したユウスケが、困惑しつつも名前を口にする。彩はハートの形をしたサングラスを身に付け、頭には赤のリボン。アイドルがしないような、非常に目立つ格好をしていた。

彩を含む『クインティップル』全員とは面識があり、護衛を務めていることも把握している。

「どうですか？　ちゃんと変装できました？」

「う、うーん……まあまあかな」

返答に困ったユウスケは、濁すように応える。

「そうですかあ……でも、全然声かけられないんですね……」

「う、うん……」

（話しかけられたいのに変装してるの！？　というか、それアイドルとしてマズくないか）

!?

「ユウスケさんは、どうしてここにいるんですか？」

「それは……」

まりなに反発した――

仲間が増えることに拒否した――。

そんなこと、口が裂けても言えるわけがなかつた――

――グウ――――――

「?」

ユウスケが返答に困つていると、彩から腹の音が聞こえる。

「う、うう……」

彩が恥ずかしそうに手を抑える。

「どこか、食べに行くか」

ユウスケは立ち上がり、バイクを停めた場所へ足を運び始める。

「は、はい！　私奢りますよ！」

彩がユウスケの後を追う。

「大丈夫だよ。金には困つてないし、いつそのこと俺が奢るよ」

「いえいえ！ いつものお礼がしたいんです！」

「いや、俺は見返りを求めて戦つては…………」

言葉が詰まつたユウスケは立ち止まる。

自分の発言に、矛盾を感じたからだ。

（俺は、姉さんに褒められるために——見返りを求めるために戦つてきた。他の人に対して見返りを求めてないなんて口にしてきた。人々は俺を、クウガヒーローとして認めてくれた。けれど、本当は一人の女性のために——姉さんのためだけに戦つていた。こんな俺が、ヒーローを続けていいのか…………？）

「？ ユウスケさんどうしたんですか？」

「!? ゴメン、何でもな——」

我に返つたユウスケ。その瞬間、後ろから何かが迫つてくる気配を感じる。

「危ない!!」

「きやつ!?」

ユウスケは彩を守ろうと彼女を押し倒す。その刹那、ユウスケの上を何かが素早く通り過ぎる。

「人!?」

通り過ぎたものを確認したユウスケは驚く。

直感ではグロンギと考えていた彼であつたが、実際は白髪の青年だつた。

「ほう……僕の気配を感じ取るとは。思つていたよりは強そうだな……クウガ」「お前、何者だ！」

ユウスケは立ち上がり、身構える。

「僕か……そうだな……『創造主』様の忠実なる下僕とでも言つたところだな」「創造主？ 何を——」

「お喋りはここまでだ。新世界を創造するため、クウガ……お前には消滅してもらう

「……彩ちゃん、下がつてて」

ユウスケは離れるように彩に指示を出す。この場から逃がした場合、ユウスケの助けが届かない場所でグロンギに襲われる可能性があつたからだ。

彩は頷き、後ろに下がつてユウスケから離れる。

「……彼女、まだ生きていたか。てつきり報告漏れだと思つてたんだが……どうやら、グロンギの中に『ネオ』になる資格を持つものは出なさそうだな。まつ、あくまで選ぶのが面倒だからゲルルにしただけで、適当なグロンギにすればいいか」

「!? お前、やつぱりグロンギの仲間か！」

「仲間？ 今のは話でそういう風に聞こえたか？」

「くッ!!」

馬鹿にされたように聞こえ、怒りがこみ上げてきたユウスケ。彼は前腰に両手で三角形を作るようにならし、クウガの変身ベルト『アーフル』を出現させる。

右腕を左上に構え、右へと平行移動させる。

「変身!!」

掛け声とともにアーフルの左側にあるスイッチを、両手を重ねて押し込む。すると、アーフルの中央が赤く光り出し、回転を始める。

次第に回転速度が上がり、ユウスケの体に赤の鎧が身に纏われ、『仮面ライダークウガ』へと変身を遂げた。

「…………」

青年は右手を前に出し、人差し指を上にクイクイッと曲げて挑発する。

「変身しないのか!?」

ユウスケは驚き戸惑う。

怪人か、もしくは仮面ライダーに変身すると思つていたからだ。どちらにしても、敵意を剥き出しにしている相手とはいえ、生身の人間相手に戦う事にユウスケは抵抗があつた。

「するかどうかは、お前の実力を把握してからだ。無駄なことはしなくない」

「ツ!! 後悔させてやる!」

ユウスケは青年へ勢いよく殴りかかる。青年は流れるようにスツとかわし、彼の背中に裏拳を入れる。

「がはあ!!」

青年の力は人知を超えており、ユウスケの体が軽々と吹き飛ぶ。彼の体が地面に着く前に、青年が飛ぶ方向に先回りし、彼を反対方向に蹴り飛ばす。

ユウスケは無様に地面を転がる。

「……この程度なら、話にならないな」

「うるせえ!  
超変身!」

ユウスケは立ち上がり、赤の鎧から青の鎧へ——『ドラゴンフォーム』へと姿を変え  
る。

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」

ユウスケは走りながら落ちている木の枝を拾い、それを杖に——ドラゴンロッドへと変形させる。その勢いのまま、青年にロッドを振り下ろす。

青年はあつけなくかわし、ユウスケの右肩に拳を入れようとする。ユウスケはその攻撃をロッドで防いだ。

青年は一度身を引き、素早く彼の後ろへ回り込むが、その動きに反応できた彼は後ろ

を向きながらロツドを青年の脇腹に当てる。

青年の体が横に吹き飛び転がるが、青年はその勢いを利用してスッと立ち上がる。  
「ほう……スピードが上がるのか。なら――！」

青年は目にも留まらず速度で動き、ユウスケの全身を連打する。

「ああああああああああああああああああああああ！」

ユウスケは悲痛の声を上げ、青年に蹴り飛ばされた後、変身が解ける。

「弱い……弱すぎる!!」

さつきまで冷静沈着だった青年が一変。鬼のような険しい表情を浮かべ、声を荒げる。

「仮面ライダークウガはこんなものなのか!? ふざけんじやねえ!!」

青年は倒れているユウスケに近づきつつ、何もない空間から全身紫色の剣を取り出す。

「弱い戦士に興味はない。存在ごと——消え失せろ」

青年は剣をユウスケに振り下ろす。

かわせる状態じやなかつたユウスケは、受ける覚悟を決めるが――

「うつ!!」

後ろで見ていた彩が、ユウスケを庇つて大剣を受ける。

「彩ちゃん!?」

1?

ユウスケは動搖しながら、崩れる彼女を受け止める。

青年も彼女の行動に驚き、一步引く。

「彩ちゃん！ どうして俺なんかを！」

「良かつたあ……ちゃんと恩返し、できたかな?」

「何言ってるんだよ！」

エウスケは涙を浮かべる  
それを見た瀕死の彩は  
手を震わせながら彼の涙を拭う

他の皆をよろしく

彩の体が発光し、光の粒となつて消滅した。

ユウスケは泣き叫ぶ

自分のせいでも、人を死なせてしまつた。

守るべきものを、守れなかつた。

……興ざめした。今日は帰る

青年は剣を消滅させ、ユウスケに背を向けてこの場を去る。

「許さねえ!!  
変身!!」

ユウスケは涙を流したまま、再度クウガへと変身する。

「はあ…………『見逃してやる』と聞こえなかつたのか!!」

青年も剣を再び取り出し、振り返りながらユウスケを斬る。

「ぐはッ!!」

ユウスケは倒れ、その上に青年が片足を置く。

「後味は悪いが……どのみちこいつは消滅する運命だ」

青年は剣をユウスケの首に突き刺そうとする。

「!?

その寸前、別方向から来る殺気を感じた青年は、ユウスケから素早く離れる。

仮面ライダー・ディケイド——門矢士が青年に飛び蹴りを食らわせようとしていた。攻撃をかわされた士は、ユウスケの前に着地する。

「お前……どうしてここに?」

「買い物帰りに、不穏な叫び声が聞こえたからな」

士は、夕飯の食材を買った帰り道にユウスケの叫び声を聞き、公園へ駆けつけたのだ。買い物をした証拠に、右手に食材が入ったレジ袋が持たれている。

「馬鹿な…………なぜ…………!?」

士の姿を見た青年が驚きの表情を浮かべる。それも束の間、すぐに表情が戻り、安心

したようにため息を吐いた。

「なんだ、『破壊者』か。てっきり『異端者』の方かと思ったよ」

「破壊者？ 何の話だ」

青年の口から出た言葉に、土はレジ袋をユウスケの前に置きながら反応する。

「知らないのか？ 自分が何者なのか」

「さあな。記憶がないんでね」

「……そうか。丁度いい。一度でもいいから攻撃を当てられたら——」

青年は剣を構えて士と戦おうとするが、彼の脳内に何者かの声が響く。

『——白也、その辺にして引き上げろ。緊急事態だ』

(十秒待て。すぐに片付ける)

青年——白也是テレパシーを返した。

『相手は破壊者だろ？ 未知数が相手では十秒で倒せる保証はない。それに何より、ビ

ルドの世界に送った幹部が殺された』

(?)

『これで“ネクスト・ワールド”的幹部九人全員が殺された。体勢を立て直したい。すぐに戻つてくれ』

「…………」

白也は剣を消滅させ、士に背を向ける。

「悪いが、勝負はお預けだ。また会おう」

「逃がすか！」

士はライドブツカー『ガンモード』で彼を狙撃する。

しかし、彼は着弾するよりも早く移動し、この場から去つていった。

「……奴は一体何者なんだ?????」

士が変身を解く。

「…………」

ユウスケも立ち上がりつつ変身を解くが――

「……俺は、俺は守れなかつた！ 彩ちゃんを！！」

「!？」

すぐに膝を地に着かせ、涙を流す。

ユウスケの言葉を聞いて、士は彩が亡くなつたことを知る。

「クウガ失格だ!! 俺にはもう……戦う資格なんてない!!」

「…………」

士は、彼にかける言葉が見つからなかつた。

「ユウスケ!!」

ユウスケの後方から、彼をやつと見つけられたまりなが彼の元へ走り寄る。

「姐さん……」

ユウスケは涙を流したまま、まりなの方を向く。

「ユウスケ!? 何があつたの!?

まりなは片膝を地面に置き、ユウスケと視線の高さを合わせる。

「姐さん……ごめん!! ごめんなさい!!」

ユウスケはまりなの両肩を掴む。

「守れなかつた!! 彩ちゃんを!!」

「?」

まりなは何故か頭に疑問符を浮かべるような顔をする。

驚いた様子もなく、ユウスケの言つていることが理解できていないような顔だ。

「謝つて許されることじゃないのはわかってる!! 何をしても償えないことも

——!!

「ユウスケ、ごめん……」

まりなはユウスケの両腕を優しく降ろし、耳を疑うようなことを口に出す。

「『彩ちゃん』つて  
.....  
誰？」

第十一話 均衡を保つ者たち

「嘘……でしょ……？」

司の部屋

真っ二つになつてゐる緑色の『ディケイドライバー』を見て、紗夜が震える。

紗夜はドライバーを拾い、見回す。

(夢に出てきたものと一緒に戦うやつて戦っているの!?) もし司がこれを使って戦っていたとすれば、今はど

紗夜は大量の汗を流すほどの焦燥に駆られる。

夢の内容が正しければ、『司』も『士』と同様に仮面ライダーに変身して戦う。そのためのドライバーがここにあるのだ。

少なくとも今、司は『仮面ライダーデイケイド』に変身できない状態に置かれているのだ。

（予備用があるとは考えられない……！）司は普段おどおどしているけれど、一度覚悟を決めたら自分の意思を曲げない。まさか……生身で怪物と戦っているんじや——

予備用があるとは考えられない……！ 司は普段おどおどしているけれど、一度覚悟を決めたら自分の意思を曲げない。まさか……生身で怪物と戦っているんじゃ——

に投げ入れる。

「あつ、おねーちゃん。こつちにいたんだ」

扉を開けてきたのは日菜だった。

「日菜、ノックしなさい」

「えつ、ここもう一人の士さんの部屋だよ?」

「司がいるかも知れないでしょ?」

「…………え?」

日菜の目が点になる。

当然、紗夜の言葉はただの冗談ではあるが、彼女の口から冗談が飛び出てくるのは、非常に珍しいことだった。

「ごめんなさい、今のは冗談よ。そろそろ門矢さんが帰ってくる頃でしょから、下に戻るわ」

紗夜は微笑みを浮かべながら部屋を抜け、一階のリビングへ向かう。

「う、うん!」

日菜は戸惑いつつも、紗夜の後を追う。

「ふう…………」

紗夜はソファに座り、気晴らしにでもとテレビを点ける。

その隣に日菜が座る。

『どんな笑顔にでも、幸せ来ちゃうよ♪』

テレビには、『クインティップル』だつたものが写っていた。

——そう、『クインティップル』だつたものが——

「あつ！　『クアドラプル』だ！」

「ええ…………ええ!?」

紗夜が驚いた顔を日菜に見せる。

自分の記憶が間違っているのか——紗夜は改めてテレビをよく見る。

テレビでは、1周年記念ライブの映像が流れている。

しかし、テロップに書かれているグループ名が『クアドラプル』となつており、彼女達が歌つている曲も『クアドラプル◇すまいる』という曲名に変わつていて、  
そして何よりも——

「……丸山さんがいなーいわね」

彩の姿がなかつた。

香澄、蘭、友希那、こころの四人だけだつた。

「えっ、彩ちゃんがどうしたの？」

「どうしたのって、この中に丸山さんがいたでしょ？」

「いないよ？ 最初から四人だよ？」

「え…………？」

日菜は困った表情を浮かべている。彼女の様子から、嘘をついていると思えなかつた  
紗夜は、頭を抱え自分の記憶を疑い始める。

「でも、この中に彩ちゃんいた方がもつとるんつ！ つてなりそう！」

「…………」

「おねーちゃん、大丈夫？」

頭を抱えたまま硬直する紗夜に、日菜が心配する。

「——帰つたぞ」

それを他所に、士が家に帰つてくる。

士はスーパーの袋を持ち、リビングに入る。

「あつ、おかえり！」

日菜が目を光らせながら、テーブルの方に移動する。

士は袋をキッキン台に置きながら、テレビの映像を見る。

「……やはり、彩ちゃん——こほん、彩の存在が消えたか」

「?」

士の発言を聞いた紗夜が立ち上がり、彼のもとへ駆け寄る。

「あの中に丸山さんは、ちゃんと存在してたんですね!?」

「あ、ああ……紗夜が覚えているのは謎だが、その通りだ」

紗夜の勢いに押されそうになる士。

「だが謎の男によつて彩が殺され、命も、肉体も、存在そのものも消えてなくなつた」  
「え…………!?」

「俺もそこまでは目撃してないから、何とも言えないがな。ユウスケから詳しいことを  
聞いたが——その詳細はディナーの後で」

そう言つて、士は夕飯を作り始める。

「…………今話しなさい」

※

どこかもわからない、謎の空間にて。

そこに白也が訪れ、用意されていた椅子に座る。

椅子は円陣を組むように十二個並べられており、白也を除いて既に十人が椅子に座っていた。

「白也遅い！ 足速いんだからすぐに来てよね！」

小学生のような見た目をしている少女が、白也に文句を言う。「無駄なことはしたくないんでね」

「はあ!?」

怒った少女が立ち上がる。

「桃子ちゃん、落ち着いて」

少女——桃子の隣に座っていた、乙女のようなか弱いオーラを放っている少年が彼女の肩を掴み、優しく押して座らせる。

「青葉!! あなた、皆に甘すぎるのよ!!」

「いてつ！」

抑えられたことに不満を抱いた桃子が、青葉を殴った。

「はあ……とつと話し合いを始めてくれ、

赤松」

白也が中年の男——赤松に目を向けた。

「そうだな。時間もない、端的に話させてもらう。改めて、『ネクスト・ワールド』に送つた幹部九人が全員殺された。一人の手によつてな……」

「異端者…………」

ドラゴンのぬいぐるみを抱えた少女——黒恵が呟いた。

「つまり、今後は『プリビュース・ワールド』に来ると?」

グラマー体型のセクシーな女性——紫織しおりが問う。

「恐らくはな。そこでだ。君たち九人の配置を再構築しようと思つてな」

赤松かずさが下顎を触りながら、九人それぞれの配置先を告げる。

「灰治かいじ、お前はクウガの世界へ行け」

「おいつす、りよーかい!」

ノリが軽い青年——灰治が雑な敬礼をする。

「黒恵、君にはアギトの世界へ行つてもらう」

「…………龍騎の方が良かつた」

黒恵はぬいぐるみを強く抱きしめる。

「すまない、他に適任がいてな。和茶かずさ、龍騎の世界は君に任せせる」

「了解しました!」

茶色の短髪少女——和茶が元気よく返事をする。

「ブレイドの世界は、桃子に任せよう」

「はいよー」

桃子が適当に返す。

「越緑、響鬼の世界へ行つてくれるか?」

「…………」

爽やかな笑顔を保つた筋肉質の男——越緑が無言で親指を立てる。

「カブトの世界は…………言うまでもない」

「当然だ。僕以外に適任がいてたまるか」

白也が当たり前かのような態度を取る。その様子に再び桃子が立ち上がろうとする  
も、空かさず青葉が止める。

「電王の世界には青葉を行かせよう」

「えつ!? あつ、はい! 頑張ります!!」

青葉は困惑した後、起立して真剣な表情を見せる。

「キバの世界は紫織だ」

「お任せください」

紫織は丁寧に一礼する。ただ一礼しただけだが、なぜか色っぽく見えた。

「皆、よろしく頼む。全世界の均衡を保つために——」

赤松が神に祈りを捧げるよう手を組んだ。

「…………もう終わり? なら帰るけど」

桃子がダルそうに席を立つて場を去ろうとする。

「待て、桃子」

彼女を呼び止めたのは白也。しかし、彼女が止まつたのを確認した後、赤松に話を振る。

「ところで赤松、席が一つ多く用意されてるようだが？」

「気づいたか。さて、ここからが本題だ。実は紹介したい人物がいてな。異端者を倒す最終兵器だ」

赤松が説明していると、後ろから一人の少女が歩いてくる。

右手に変な形をした銃を持つ、青緑色の髪をした少女が、無表情で空いている椅子に座る。

「紹介しよう…………冰川日菜だ」

※

「……なるほど、わかりました」

司の家。

料理を作つてゐる士から話を聞いた紗夜が話を理解する。  
なお、士が今作つてゐるのは、普通のチャーハンである。

「謎の男が現れ、小野寺さんを殺そうとしたところ、丸山さんが庇つたと  
まあそんな感じだ。そのショックが大きくて、今は廃人みたいになつてゐるだらうけど  
な。あとの事はまりなに頼んだが」

士は出来上がつたチャーハンを皿に移しながら、他人事のように話した。

「ええ!? 彩ちゃん死んじやつたの!?

話を聞いた日菜が驚いた顔でキッチンの方へ。

「そうだ。存在が消えたのは謎だがな」

士は答えながら、三人分のチャーハンをテーブルに運ぶ。

「そ、そんな……許せない……犯人早く捕まえないと!!」

「捕まえるのは至難の業だな。最悪、殺すしかないかもな」

「殺すつて……」

その言葉に反応したのは紗夜。

「そんなことは——!」

「やるなつて？ 相手は存在<sup>ご</sup>と殺す奴だ。説得が通じる相手でもない。もとい、そんな奴を生かしておいたら、この世界は存在<sup>ご</sup>と滅びるだろう」

「…………」

返す言葉がない紗夜。この重い空気を変えようと、日菜がキッチンからスプーンを三人分持ち出し、紗夜と土の分を机に置く。

「チャーハン美味しそう！ いただきまーす!!」

日菜が真っ先にチャーハンを口に運ぶ。

「んう～！ おいしい!!」

日菜は頬を空いた手で抑えながら、味を堪能する。

「……チャーハン」

紗夜がチャーハンを凝視しながら椅子に座る。

「いただきます……」

紗夜がチャーハンを口に運ぶ。

「……………普通ですね」

味を噛みしめた後、冷たい感想を述べた。

「おつと、紗夜様の口に合わないものを作つてしまつたか」

士は皮肉を込めて言い、椅子に座つて自分が作つたチャーハンを食べる。

「我ながら最高だ……」の味がわからないとはな

「わからなくていいです。誰がどのチャーハンを作つても、あの味には勝てませんから」「司」——の味にか?」

「…………」

紗夜は無言でチャーハンを食べ続ける。

——図星だった。

司はチャーハンが好物であり、特に食べたいものがない時は決まつてチャーハンを食べる。司も自炊でき、家でよくチャーハンを作つてゐる。紗夜は一度、彼が家に来た際に作つてもらい、食べた経験があつた。

紗夜はあまりチャーハンを食べないのだが、司の作るチャーハンは特別美味しく感じた。

彼が作つたからこそ、特別美味しく感じたことを、紗夜は知る由もなかつた。

「司」——

「おねーちゃん…………」

紗夜は無意識に涙を流していた。涙を流したまま、チャーハンを食べていた。

「……はあ」

士はため息を吐き、食べ続ける。

（もう一人の俺は何を考えてんだか。こんなに想つてくれる人を放つてまで、やることがあるのか？）

※

同時刻の山奥にて。

「はあ……この世界つまんねえな」

灰治がクウガの世界に訪れていた。

「どこもかしこもアイドルアイドルアイドル！ 気持ち悪いたらありやしねえ！ 森

林の中だけが、落ち着ける場所だな」

灰治は山の中を歩き続いていると、石でできた棺桶を見つける。

「おつ、あつたあつた！」

灰治は棺桶を開け、中身を確認する。

中には、赤色の狼のような怪人が永眠している。

「こいつには、暴れてもらわないとなあ……！」

る。灰治はクウガの紋章が描かれた黄色の小さな球体を取り出し、不気味な笑みを浮かべ

# 第十二話 忘れた者、覚えている者

「司！ 駄目！」

紗夜は再び夢を見ていた。

彼女が覚えていない、過去の記憶——

紗夜は目に涙を浮かべながら、司の背中にしがみつく。

「一人で立ち向かうなんて無茶よ！」

「…………」

全身傷だらけで、今に倒れてもおかしくない状態の司は、その場を動くことなく紗夜に告げる。

「…………めん、※※※を止められるのは、もう俺しかいないんだ」

「司、お願ひ…………一緒に逃げましょう…………！ 誰もあなたを責めたりしない！ だから

――

「…………紗夜、ありがとう」

司は後ろを向き、紗夜を抱きしめる。

「？」

彼女の唇に、自分の唇を重ねながら――

「……………」

キスは十数秒続いた。終わつた後も、紗夜は放心状態で司を見続ける。そんな彼女に、司は優しく頭を撫でる。

「ありがとう。最後まで、俺の存在を認めてくれて。本当に……ありがとう」

司は紗夜を後ろに押しとばす。

彼女の背後には、『オーロラカーテン』と呼ばれる白黒の靄が出現していた。司は彼女にそつと微笑みを浮かべた後、振り向いた先にいる巨大な化け物と対峙する。

『ライドブツカーだつたもの』を片手に。変身せず、生身で。

「司!!」

紗夜は体が飛んでいる中、彼に向けて手を伸ばす。  
しかし、その手が届くわけもなく、彼女は『オーロラカーテン』に飲まれるように――



「っ!!」

紗夜が飛び上がるよう目を覚ます。

飲まれた後どうなつたのか体験する前に。

紗夜、日菜、士の三人は夕飯を食べた後、各自お風呂に入り、そのまま流れるように眠りについたのだ。

紗夜は自分の名前が書かれた部屋。日菜はその隣の女部屋。士は司の部屋——で眠ろうとしたが紗夜が頑なにそれを拒み、男部屋は何故か生理的に受け付けなかつため、やむを得ず一階のソファに寝ることにした。

「今のは…………!?」

紗夜は呼吸を乱し、体を震わせる。

夢じやないような、現実味のあつた出来事に恐怖を感じたから。  
そして何より、司とキスしたことに戸惑っていた。

「……？　おねーちゃん、どうしたの？」

「いえ……何でも——つて日菜!？」

隣の部屋で寝ていたはずの日菜が、紗夜の隣で横になっていた。

日菜は最初からここにいましたみたいな態度で目を擦る。

「どうしてここにあなたがいるの!?」

「だつて……あつち寝心地悪いんだもん……それよりおねーちゃん」

「?」

「このベッドから男の匂いがするんだけど……」

日菜がベッドのシーツの匂いを嗅ぎながら言つた。

「多分司でしよう？ そもそも彼の家なのだから、匂いが染みついててもおかしくないわ」

「うーん……でもこの匂い、ただ部屋の匂いが移つただけとは思えないんだよねー……」

「元々彼が使用していた物かもしないわ。とにかく、朝だから起きるわよ」

紗夜はベットから降り、クローゼットを開いて中から私服を取り出し、着替える。

「……おねーちゃん、私服持ち歩いてたつけ？」

「何言つてるの？ ここは私の部屋なんだから——え……？」

日菜に言われ、すぐさま反論する紗夜であつたが、自分の発言が着替える前の言葉と矛盾していることに気づき、そこから私服があることに違和感を覚える。

ここは『紗夜の部屋』であつても『司の家』である。

紗夜は改めてクローゼットの中を見る。

「?」

紗夜が普段着ている服の殆どが、そのクローゼットの中にあつた。  
しかし、彼女が驚いたのはそこではない。

今彼女が身に纏つた水色の服以外、殆どボロボロで何故か血が染みついていた。  
そして唯一、彼女が前日まで着ていた制服だけが、この中になかつた。  
さらに紗夜は、下の戸棚を開ける。中には、紗夜が使用している下着類が多く積まれ  
ていた。

「やつぱりおねーちゃんが探してゐる人、変だよ！」

「…………」

日菜が真剣な表情で紗夜に告げる。

しかし紗夜はクローゼットの服を数秒間見回した後、ため息を吐いてクローゼットを開じる。

「別に…………私は気にしないから」

「ええ!? 何言つてるのおねーちゃん!」

紗夜の司に対する甘い発言に、ついに日菜が怒りを見せる。

「本気で心配してゐるんだよ！ おねーちゃんが悪い人に騙されてるんじやないかって

「…………！」

日菜の言葉に反発したかつた紗夜であつたが、何も言えなかつた。司の存在が証明できるものはあつた。紗夜と関わりのある人物であることを証明するものも。

しかし、司が日菜やR o s e l i a の皆にとつて大切な存在であることを証明するものはなかつた。

その事実を、紗夜は確かめるまでもなく知つていた。

彼が撮つた写真の多くは、紗夜を焦点に合わせて撮られたもの。他の人と深い関わりを示す写真がないのだ。

確かに彼は大切な存在である。しかし、それに気づいていたのは紗夜だけだつた。正確にはもう二人いたが、それは彼女も、司自身も知らなかつた。

紗夜が黙り続けていると、部屋の扉からノックの音が聞こえ、扉越しに土の声が聞こえてくる。

「起きてるんだろう？ 朝食ができたから降りてこい」「わかりました。すぐ行きます」

紗夜は何事もなかつたかのように部屋を抜けようとした。しかし、何故か扉の前で立

ち止まり日菜の方を向く。

「……日菜。かつての私はこう言つたわね。『私にはギターしかない』と」「う、うん……そうだね……」

「ギターが大切なのは今も変わらないわ。ただ、私は……紗夜は躊躇いを見せたが、息を呑み覚悟を決める。

日菜に嫌われる覚悟を――。

「私がギターを弾き続けて来られたのは、司がいたからよ」

「え…………？」

日菜は目を大きく見開き、無意識に呼吸を止める。

「勘違いしないで。あなたとの約束は忘れてない。その約束がなかつたらその時既に私は破滅していくと思うの。けれど……元は、司が喜ぶ顔が見たくて、司の生き甲斐になつてくれるならと、ギターに力を入れていた」

「…………」

「私は司を探し続ける。どんなに長い旅になろうとも、私は死ぬまで探し続ける。必ず

見つけ出して、彼のそばでギターを弾き続ける。司は何でも一人で抱え込もうとするから、私がそばにいないと早死にしそうで心配だわ」

そう言つて紗夜は部屋を抜け、一階へ降りていく。

「…………おかしい」

一人、部屋に残つた日菜が呟く。

「あの目……あたしの知つてゐるおねーちゃんの目じやない…………」

※

午前九時を過ぎた頃――。

CIRCLEから少し離れた場所にあるビルの中。

その五階にあるアイドル事務所のレッスンスタジオにて、『クアドラブル』がダンスの練習をしていた。

「ワン・ツー・スリー・フォー！　ワン・ツー・スリー・フォー！」

友希那の声と動きに合わせて、香澄、蘭、こころの三人も踊る。

そこに、彩の姿はなかつた。しかし、彼女がいないことに四人とも何の違和感も持たず、最初からその中にいなかつたかのように練習している。

「ワン・ツー・スリー・フォー！ ワン・ツー……」

友希那は笑顔で可愛らしい声を上げながら踊つていたが、ある事に気づいた途端表情が曇り、動きを止めて口を閉ざす。

それを見た三人も動きを止める。

友希那は香澄の方を向く。

「香澄、さつきから動きが鈍いわよ！ 練習に集中して！」

元の世界の友希那のように、低く威圧的に叱る。

「うう……ごめん……」

香澄は落ち込み、視線を下に向ける。

「練習に妥協してたらトップアイドルになんてなれないわ」

「友希那、待つて」

間に入ってきたのは蘭。彼女が友希那を呼び捨てにするのは違和感があるのだが、この世界ではこれが普通である。

もとい、四人は全員同期であり、上下関係を作らずに活動してきたのだ。

「どうしたの、蘭？」

「どうしたも何も、香澄が練習に集中できないのも無理ない。あの人がずっとあの調子なんだから……」

蘭は部屋後方の片隅に座っている、無気力な顔をしたユウスケに視線を向ける。  
すると他の三人も彼に目を向ける。

「確かに気になるわね。練習の邪魔になる要因は取り除いておかないと」  
友希那がユウスケを睨るように見る。

「本当に、どうしたんだろう…………？」

本気で彼を心配する香澄。

「直接聞いてみましょー！」

気になつたこころが、遠慮無く彼本人に事情を聞くことに。

「ちよ、こころ！ マズいって！」

蘭が呼び止めるも、こころは止まらなかつた。

「どうしたのユウスケ？ 今日は元気がないみたいだけれど？」

「…………」

こころは悪気のない、無垢な笑みを浮かべながらユウスケに尋ねた。

ユウスケは顔を上げたが、彼女の顔を数秒間見つめた後、また顔を下げる。

「悩みがあるなら、皆で解決すればいいのよ！ 話してみて！」

「こころ！ これ以上は――！」

まだ止まらないこころに対し、蘭が強引に腕を引っ張つてユウスケから離そとす

る。

「…………無理だ」

ユウスケが下を向いたまま、口を開く。

「無理かどうかは、やつてみなきやわからないわ！」

彼のネガティブな発言にこころは空かさず言葉を返した。

「人を生き返らせることが、できるのか？」

誰もが無理だと答える、冗談で言っているような質問をユウスケは投げた。

「それはできないわ。もしかして、大切な人が……？」

事を察したこと、流石のこころも笑顔が消え、悲しい表情を浮かべる。

「大切な人……確かにそうだな。でも——」

ユウスケは顔を上げ、立ち上がる。

「それは君たちにとつての、大切な人だよ」

「？」 「？」 「？」

「？」

『クアドラー』の四人は疑問符を頭に浮かべながら、互いの顔を見る。その様子に、ユウスケは溜めていた怒りを爆発させてしまう。

「どうして!!」

「!?」

急に怒りを見せた彼に、四人は戸惑い驚く。

「どうして平然としてられるんだよ!! 彩ちゃんがいないことに、どうして違和感を持つてないんだよ!!」

「彩…………？」

「香澄、知ってる?」

「ううん…………」

「あたしも知らないわ」

友希那、蘭、香澄、こころ。誰一人、彩のことを覚えていなかつた。

「なんで……忘れられるんだよ……俺が覚えてて、どうして皆は…………！」

ユウスケは膝を床に着け、涙を流す。

その様子に、四人はただ戸惑うことしかできない。

「皆お疲れ——つてユウスケ!」

レツスンスタジオにまりなが差し入れを持つて入つてくる。しかしユウスケの様子に驚き、差し入れが入つた袋を落として彼に駆け寄る。

「本当に大丈夫なの!? 昨日から変だけど——」

「うるさい!!」

「きやつ！」

ユウスケはまりなを振り払う。まりなは体勢を崩し、後ろに倒れそうになる。

「つ……!?

そんな彼女を後ろから抱えるように、士が支えた。彼の背後に、紗夜と日菜の姿もあつた。

まりなは思わず胸がときめき、失神する。

「士…………」

彼の姿を見たユウスケは、我に返る。

「なんだ、心配して来てみれば、悲劇のヒーロー気取りか?」

士はまりなを床に寝かせつつ、ユウスケを煽る発言をした。

それを他所に、日菜は気を失っているまりなを不思議そうな顔でつつく。

「…………」

本来のユウスケであればここで怒るのだが、今の彼にその気力すら残されていなかつ

た。

「その様子なら、護衛を続けるのは難しそうだな。俺が代わりになつてもいいが」

「……そうしてくれ」

ユウスケは立ち上がり、体を引きずるように部屋を抜けようとする。

「待ってください！」

彼の前に立ちはだかったのは、紗夜。

「どうして逃げるんですか？」

「……君には関係ないだろ」

ユウスケは目を反らしながら、紗夜を通り越してこの場を去ろうとする。紗夜はそんな彼の肩を強く掴み、自分の方を向かせた後、彼の頬をはたいた。

「ツ！」

紗夜のビンタは思いのほか強く、ユウスケは吹き飛ぶように横に倒れた。

ユウスケは驚いた顔で、頬を抑えながら紗夜を見上げる。

氣絶しているまりなを除いたユウスケ以外の者も驚き、思わず身を引いていた。

「あなた、それでも『クウガ』なんですか!? あなたが戦わなかつたら、この街も住民も皆グロンギによつて破壊されます！」

「安心しろ、俺が戦えば——」

「門矢さんは少し黙つてください」

間に入ってきた士に対し、紗夜は強く睨み付ける。

「…………ああ、わかつた…………大体、わかつた……」

先程のビンタを目の当たりにした士は彼女に恐れを抱き、思わず両手を上げる。

「ねえ、何が大体わかつたの？」

士の発言に、日菜が天才特有の疑問をぶつける。

「…………想像に任せよう」

士は答えを誤魔化した。

日菜はそれを真に受け、頭を悩ませ始める。

紗夜は二人の様子を気にせず、ユウスケの方を向き直る。

「小野寺さん、あなたはこの世界で数少ない——いいえ、この世界で唯一グロンギと戦える者、この街を守れる者です。『クウガ』となつた経緯はわかりませんが、その力を、力のない者のために戦うべきです。そうすればきっとまりなさんも、丸山さんも褒めてくれますよ」

「!? 彩ちゃんを、覚えているのか!？」

「ええ。理由はわかりませんが、私はちゃんと覚えています。丸山さんがこの世界にいたこと、彼女が歩んできた人生をなかつた事にしないためにも、あなたは戦い続けるべ

きです」

「俺は…………」

紗夜の言葉を受けるも、迷いを見せるユウスケ。  
しかし戦う意志が少しづつ、確かに戻ってきていた。

「大変だ!!」

すると突然、三十代の男が焦った様子でこの部屋に入つてくる。

「マネージャーさん、慌ててどうしたの？」

「こうが男——マネージャーに尋ねると、とんでもない話が出てくる。

「街の人気が…………化け物に…………化け物に変わってるんだ!!」

## 第十三話 災害

「街の人が…………化け物に…………化け物に変わってるんだ!!」

「?」

マネージャーの話を聞いた士、紗夜、日菜、ユウスケ、クアドランブルの四人が驚愕する。

「住民がグロンギに変わっていると言うんですか!?」

紗夜がマネージャーに改めて尋ねる。

「こ、これを……！」

マネージャーはスマホを取り出し、横にして紗夜に画面を見せる。

気になつた他の七人も、スマホの画面を見る。

画面には、ニュースの中継映像が映し出されている。マイクを持つた女性リポーターが、黒い煙を放つて山を背景に状況説明をしていた。

『ただ今、あちらの山から五キロ離れた場所にいます。ここからでも謎の煙が山から大量に、止む気配もなく溢れているのが見て取れます。山が噴火した様子もなく、煙の正体及び発生原因も不明の状態です。引き続き、こちらに残つて山の中継を——ごほつ！』

げほっ！」

黒い煙が尋常じやない速度で背後から迫り、女性リポーターを包み込んだ。近くにいたカメラマンやテレビ関係者も巻き込まれ、カメラマンは思わずカメラを落とす。

『うつ…………ああ…………ああああああ!!』

地面に落ちたカメラは、リポーターの足下を写した状態となり、彼女が瞬く間に異形の姿に変わつていくのを捉えていた。

変わり果てたその姿は、まさにグロンギそのものであつた。

そして映像は、グロンギがカメラを踏み潰すところで終了した。

「…………!?」

信じられない光景を見た全員が息を呑んだ。

「…………」

その中で、何かを思つた士は部屋から出ようとする。

「門矢さん！」

紗夜は士を呼び止めた。

士は扉の前で立ち止まる。

「……俺が街に溢れたグロンギを倒す」

「黒い煙に巻き込まれたら、門矢さんでもグロンギになる可能性はあるんですよ!」

「俺は大丈夫だ……そんな気がする。それに、俺がグロンギを止めなきや、被害が増えるだけだ」

そう言つて、士は部屋を出て行つた。

「……私は、街の人たちの避難させます」

「あたしも手伝うよ！」

紗夜と日菜も動こうとする。

「私たちも手伝え！」

香澄が躊躇いを見せずに声を挙げた。

それに応じてクアドラブルの他三人も頷く。

「あなた達も避難を……と、一般人である私が言つても説得力がありませんね。身に危険を感じたら、必ず自分第一に逃げることを約束してください。この状況なら、誰も責めませんから」

「「「はい！」」」

クアドラブルの四人が声を揃えて返事をする。

「それと、小野寺さんはまりなさんの傍にいてください」

「…………」

自分も士と共にグロンギを倒しに行くべきでは——と思うユウスケであつたが、言い

返す余裕もなく紗夜の言うことを従うこととした。

「それでは、行きます」

紗夜を先頭に、日菜とクアドラブルの四人は部屋を出て行く。

「えつ、わ、私も……!!」

置いてけぼりだつたマネージャーも、彼女達の後を追う。

「…………」

レツスンスタジオに残されたユウスケと、気絶したままのまりなが取り残された。

※

高層ビルが並ぶ駅前。

そこには既に数多くのグロンギが、人々を襲っていた。

その現場に、士が到着する。

「多い……早くも旅が終わるかも知れないな」

士は一人、彼らしくない弱気な言葉を呟きながらディケイドライバーを取り出し、腰に装着する。

ハンドルを引いた後、R<sub>ライドブツカ</sub>からディケイドのカードを取り出す。

「——変身」

カードをバツクルに挿入し、ハンドルを押し戻した。

『カメンライドオ!』

『ディケイド!』

士は、仮面ライダー・ディケイドへと変身を遂げた。

「さて……行くか!」

自分の手を払つた後、『ソードモード』にしたRBを構え、グロンギの群れに突撃する。  
「はあ！」

士の先制攻撃が、複数のグロンギに当たる。攻撃を受けたグロンギたちが士に標的を絞り始め、攻撃を始めた。士はグロンギの攻撃をかわしつつ、グロンギに深い斬撃を入れ、数を減らしていく。しかし、一向に少なくなる気配がなく、グロンギたちは一般人への攻撃を止めて、士の排除を最優先にする。

「いくらでもかかるでこい！」

士はアタッククライドカードを取り出し、バツクルに挿入して発動する。

『アタッククライドオ!』

『スラッシュ!』

RBの刃がマゼンタ色に光り始める。

囲み襲おうとするグロンギに対して、士は横に回転しグロンギを一気に斬り倒した。今の一撃で十体のグロンギを倒すことができたが、それでも終わりが見えてこない。（俺はまだ自分のことを殆ど知らない……だから、ここで終われない！）

士はめげずにグロンギを倒し続ける。

「ツ！」

すると突然、彼に黒い稻妻が飛んでくる。グロンギたちに夢中だつた士はかわせずに直撃を受け、吹き飛んでしまう。

士は雑居ビルの壁に激突するも、素早く体勢を整え、周囲を見渡す。

上空に、他のグロンギとは明らかに異質なオーラを纏う、狼のようなグロンギが浮遊していることが確認できた。そのグロンギこそ、士に稻妻を当てた張本人だ。

そのグロンギの周辺には、一般人をグロンギに変えたものと同じ黒い煙が漂つていた。

「あれが親玉か！」

士はRBを『ガンモード』に切り替え、狙い撃とうとした。しかし、他のグロンギが士の邪魔をするかのように、彼に攻撃を仕掛ける。

「くッ！ 邪魔だ！」

士は周囲のグロンギを片付けることを先にしようと考え、周囲のグロンギに弾を発射

し始める。

「おつ、賑やかじやねえか」

士が戦っている様子を、高層ビルの屋上から灰治が見ていた。  
「にしても、クウガは来ねえのかあ？ 早く戦いたいんだがなあ」

※

「…………」

レツスンスタジオの窓から、ユウスケは街の風景を見ていた。

一般人を襲うグロンギと戦う警察たち、避難誘導を行つている紗夜たちの姿が見える。

(皆が戦っている…………皆が皆のために――――そうか！)

ある事に気づいたユウスケ。

相変わらず気絶したままのまりなに歩み寄り、小さく呟く。

「姐さん。行つてくるよ」

戦う意志が固まつたユウスケは、レツスンスタジオを抜け、外に出る。

走りながら前腰に両手を添え、『アーフル』を出した。

「変身!!」

『アーフル』のスイッチを押し込み、ユウスケは『仮面ライダークウガ』へと変身を遂げた。

「はあ!!」

ユウスケは目の前にいたグロンギに攻撃を始める。

彼の存在に気づきだした周囲のグロンギたちが一般人への攻撃を止め、標的をクウガに絞り、一斉に攻撃を始める。

「やつと出てきたか!」

「?」  
何者かの声が聞こえたかと思えば、周囲のグロンギの頭に矢が刺さる。  
刺さった場所からクウガに似た紋章が浮かび上がった後、グロンギたちが爆散した。

「仮面ライダークウガ! 僕と戦え!」  
ビルから降りてきた。灰治の右手にはボウガンがある。

「仮面ライダークウガ! 僕と戦え!」

「!? お前、白髪の人の仲間か!?」

灰治が只者ではないと察知したユウスケは身構える。

「白髪……ああ、白也のことか。仲間つちや仲間だな」

「……何しに来たかわからないけど、今は構ってる暇は——」

「俺がこの騒ぎを起こした張本人——つて言つたらどうだ?」

「!?」

「今そちら辺のグロンギを倒すより、黒幕を倒す方が効率いいと思わないか?」

「…………!」

灰治の挑発に乗つた訳ではないが、ユウスケは先制攻撃を仕掛けた。灰治は難なく横に回避する。

「おつ! やる気になつてくれたか! でも変身くらいさせてくれよな!」

「変身?」

灰治はボウガンを横に投げ、前腰に両手を添える。

「!?」

その動作に、ユウスケは見覚えしかなかつた。自身がクウガに変身する際に、始めに行う動作と一致していた。

ユウスケの直感通り、灰治の腰に『アーケル』に似たベルトが出現する。

そして灰治は、クウガの変身動作を鏡に映したような動きで、左腕を構えた。  
「変身！」

ベルトの右側にあるスイッチを押し込み、ベルトの中央が赤紫に光り始め、回転を始める。

クウガの回転音に比べ重々しい音が響いた後、灰治の体に赤紫色の鎧が纏われ、仮面ライダーに変身を遂げた。

その姿はクウガに酷似している。大きく違う点を挙げるとすれば、クウガの覆面がクワガタムシのような角が二つ付いているのに対し、灰治の覆面にはアトラスオオカブトのように中央にも角が付いていた。

「仮面、ライダー…………!?」

仮面ライダーへと変身を遂げた灰治に、ユウスケは戸惑いを隠せない。

そんな彼に灰治は、当然のように淡々と話す。

「そう、仮面ライダー…………『仮面ライダーカイア』だ」